

墓葬装飾における祥瑞図の展開

菅野 恵美

はじめに

漢代に流行した墓葬装飾は、後漢になってその最盛期を迎え、画像の種類および画像の密度が増加したことは研究上よく知られていることである。墓室や祠堂などの建築物は、神仙世界の禽獣・事物、歴史故事図、古代の神・帝王の図像、社会生活図、紋様などにより、更に立体的かつ複合的な空間となっていくた。このような形勢の中で、墓葬装飾に新たに加えられた画像の種類の一つが「祥瑞図」である。

祥瑞は天子の徳に天が感応して下すとされるものであり、墓葬装飾における祥瑞図の本格的な出現は、後漢の中期から顕著となる。

これまでの祥瑞図の研究としては、林巳奈夫氏の祥瑞図の比定研究（林巳奈夫、一九七四）、巫鴻氏による、武

氏祠堂画像石の祥瑞図と題記の整理、および思想的背景への言及 (Wu Hung、一九八九)、田中有氏による武氏祠・望都漢墓・和林格爾漢墓の祥瑞図の題記解釈がある (田中有、一九八四)。また、佐原康夫氏は祠堂の役割と画像内容との関係を考察することで、漢代人には自らの「至誠」「至孝」といった行為が、天をも感銘させるといふ宗教的信仰心が生じていたことを指摘し、その例証として、祥瑞図にも言及している (佐原康夫、一九九一)。

上記の諸研究では留意されなかったことだが、祥瑞図の表現の方法としては二種類が想定される。一つは祥瑞の種類ごとに単独で描かれるもの、一つは画像の余白を埋めるなど、他の図像と共に画像の構成要素となるものである。本研究では独自に、前者を「図解的祥瑞図」、後者を「構成的祥瑞図」と名付け区別して論じたい。

このように祥瑞図の表現方法を区別してみると、これまでの研究では、墓葬装飾における祥瑞図のあり方の変遷については明らかにされていないことに気づく。つまり、祥瑞図単独に対する関心のみで、他の図像と共に画像の構成要素となる祥瑞図については指摘されておらず、祥瑞図がどのように他の図像と結びつき存在しているのか、また、祥瑞図の画像全体における役割・効果については考察の余地がある。そして上述の佐原氏のような視点を踏まえ、祥瑞を媒介とした人と天との関係についても研究する必要があるだろう。このような点を中心に、本論では文献における祥瑞の現れ方と画像資料とを複合的に検討した上で、さらに墓葬装飾に祥瑞図を必要とした当時の思想についても考察したい。

一 祥瑞図の流行とその契機

(1) 識緯と祥瑞の関係

祥瑞は様々な事象で予告される吉兆である。孔子が「鳳鳥至らず、河は図を出ださず、吾れ已んぬるかな」(『論語』子罕)と嘆いたように、珍しい禽獣が祥瑞として認識されたのは古い。しかも、青銅器に想像上の動物やそれから派生した紋様が鑄込まれているように、もっと古い時期から吉兆としてそれらが認識されていた可能性もある。

但し、祥瑞が体系化して大きな力を持つようになったのは、やはり緯書に組み込まれてからのことであろう。安居香山氏が指摘するように、緯書は前漢末から後漢にかけて形成されたものだ。¹⁾また、保科季子氏が明らかにしたように、戦国時代の文献では、周の文王・武王の革命の契機として曖昧に語られていた赤烏・白魚などが、前漢末には、祥瑞として革命の書(河図・洛書)を伴って出現していたと認識されるようになったという。²⁾そのような祥瑞を媒介として天から書を下され、受命を示すという試みは、王莽の「符命」、そして後漢の光武帝の受命へと継承される。しかし、両者の違いは、王莽の「符命」が経書と結びつかなかったのに対し、光武帝は受命・封禪の経学的な正統性を獲得するために、天より下される「図」(河図・洛書)と、孔子やその他聖人らによって「図」を説明・補充するために作られた(と考えられた)経書・緯書とを結びつけた所にあるという。³⁾祥瑞はこのように受命に不可欠な装置として緯書に組み込まれることで、経書とも結び付き、決定的な威力を持つようになったのである。緯書はその製作者を孔子に事寄せることで信憑性を備え、漢が堯の火徳を継ぐものとして位置づけられたため、後漢王朝も正統性を示すために火徳を継承するものとして緯書が作られ、さらに、将来の高祖の統治を示す孔子の予言としての緯書が時代を遡って作られた。⁴⁾後で見えるように、そのような緯書の中に出てくる動物や玉などの器物は、祥瑞として後漢の人々に認知されているのである。

祥瑞が盛んに出現したのは後漢中期である。章帝時に生きた王充は、祥瑞が最も盛んに出現したのは明帝期と云う。

孝明時は鳳皇無しと雖も、亦た麟・甘露・醴泉・神雀・白雉・紫芝・嘉禾を致し、金出で鼎見れ、離木は復た合す。五帝・三王、経伝の載せる所の瑞応は、孝明より盛んなるは莫し。〔論衡〕宣漢編⁽⁵⁾

また、後漢章帝期には「論曰く……在位十三年、郡国の上げる所の符瑞の、図書に合する者は、数百にして千所⁽⁶⁾なり」と数百の符瑞があったと言う。『宋書』の符瑞志には歴代の祥瑞例を集めて述べており、巫鴻氏が章帝期の例が一番多いと指摘するように、この時期の祥瑞出現数は極めて多い。

つまり、後漢前期から中期初めにかけての明帝・章帝期には祥瑞の数が極めて多く、祥瑞の種類は出揃い、名前やその出現の意味も定まっていたと思われる。

(2) 図解書の存在

光武帝の受命および封禅を正統づけるため、経書・緯書が受命思想と結びつけられ、さらに後漢前期には、漢の再興を確固たるものとするため、孔子によって漢高祖の建国は予言されていたと考えられるようになった。ここで祥瑞は天命を知らせる存在であり、経書と緯書によって綿密に漢の受命思想に組み込まれた祥瑞は、この受命思想の体系化の過程において、漢の天下を証明するものとして奨励され、整理・体系化されたと思われる。その場合、祥瑞を分別するための図解書が必要であった。陳槃氏は、前掲章帝期の届け出られた祥瑞のうち「図書に合する者」が数百だったという記載から、そのような図解書は章帝期にはすでに存在していたと指摘する。後漢には、祥瑞を描き説明した図譜が編纂され、後述する唐の祥瑞鏡に見られるように、祥瑞図は形を変えながら後代にも継承されたと考えられる。

ではいつごろから図解書は出現したのだろうか。麒麟や鳳凰などの身体的特徴は古くから記され、器物に画像と



図1 唐の祥瑞鏡 写真 (瑞図仙岳八花鏡. 守屋孝蔵集蒐, 図34)

して表現されてきたことから、中央や地方の官営の役所にはそのような神獸を集めた画集があったはずだ⁽⁹⁾。だが、後漢には、祥瑞図は広く地方の職人によって作られた墓葬装飾の中に同様に表現されている。墓葬装飾や、緯書との関係に見られる祥瑞図の普遍化という現象を考慮するならば、祥瑞を説明するままに図解書が形成されたのは、やはり後漢に至ってからであろう。

後漢における図解書の存在を如実に証明するのが、後に紹介する武梁祠の画像石と和林格爾墓壁画中の祥瑞図である。特に武梁祠の祥瑞図には、どのような時にその祥瑞がもたらされるかという説明が記されていた。そして、和林格爾墓に示された題記より判明する祥瑞の種類は、武梁祠の祥瑞図と重複するものが多い。このことは、これらの祥瑞図が当時通行していた同様な図解書を元に描かれた

のではないかと考えさせる。

清の乾隆五十八年（一七九三年）に出された畢沅の『山左金石志』および嘉慶十年（一八〇五年）に出された王旭の『金石萃編』には、武氏祠堂画像石の榜題（画像のそばの四角い枠に記された銘文）が全て収録される。これら二書から、榜題は、梁・孫柔之の『瑞応図』および梁・沈約の編による『宋書』符瑞志とほぼ同じであることがわかる。⁽¹⁰⁾ また、道光元年（一八二一年）の馮雲鵬・馮雲鵠『金石索』では、武梁祠の祥瑞図と榜題を模写した図を掲載し、『宋書』符瑞志の記載を引用して榜題の欠落部分を説明している。⁽¹¹⁾ 武梁の祠堂は、碑文より一五一年ごろに作られたことが分かっているため、後漢後期には後代につながる祥瑞の図解書が成立していたことになる。

例えば、唐代の祥瑞鏡には題記付きの祥瑞図が示され（図1）、⁽¹²⁾ そこには、漢代にも見られる祥瑞図の他に、連理竹や合璧・同心鳥など新たなものも加わっている。また、ペリオが敦煌で発見した瑞応図には祥瑞図が描かれ、その下に前述の『瑞応図』や『宋書』符瑞志などを引用した説明が加えられている。⁽¹³⁾ その祥瑞図には鳳凰や黄龍など漢代にも見られるものだけでなく、「発鳴」という鳳凰に似た鳥など、恐らく魏晋南北朝から唐にかけて創出されたと考えられる新しい祥瑞図も見られる。

『晋書』には連理や嘉禾といった祥瑞について、「瑞応図」を参照して説明した記載があり、すでに「瑞応図」という名の書物は存在していた。『隋書』経籍志や『新唐書』芸文志は祥瑞図や図讚の類を複数挙げているが、祥瑞を説明する書物について、陳槃氏は漢代に何種類もあり、それらが互いにかけているものを吸収し合い、また後代の人々が遺漏を拾い、残されてきたと指摘する。⁽¹⁴⁾

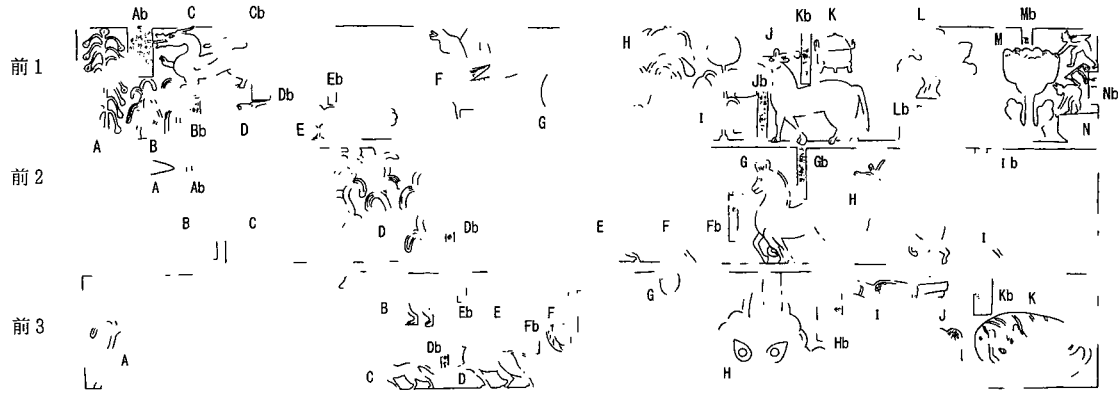
(1) 図解的祥瑞図の事例

本論の最初に述べたように、祥瑞図は大きく二つに分類できる。一つは、個々の祥瑞図が単独で表現されたもので、多くは枠で区切られ、それが何かを示す題記が書かれる。これらは図解書に掲載された祥瑞を明示するために一つ一つ描いたものであり、他の図像とともに画面を構成することはない。このような祥瑞図を本論では「図解的祥瑞図」と称することにする。

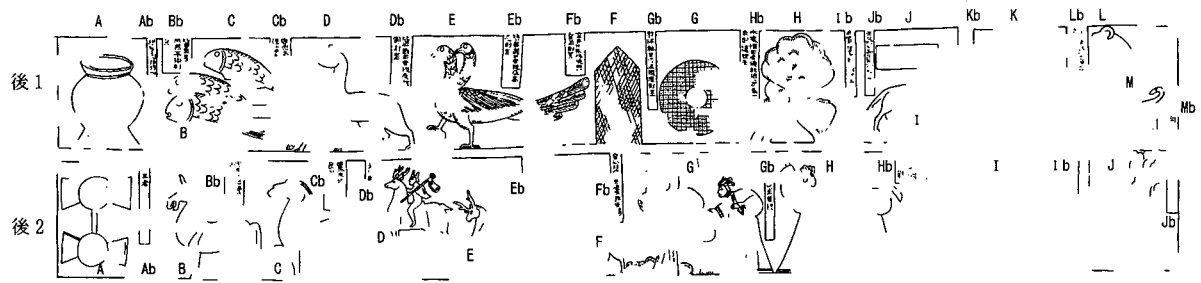
もう一つは、画像の構成要素となる祥瑞図で、本論では仮に「構成的祥瑞図」と称する。これには、天や鬼神の世界を示すなどの目的で祥瑞が一面に布されるもの、あるいは他の題材の余白に描かれ画像を構成するものがある。図解的祥瑞図としては、前述したように、山東の武梁祠の画像石、内蒙古の和林格爾墓壁画が豊富な祥瑞図を提示し、代表的である。まずこれら遺跡の基本的状況について簡単に説明する。

① 武梁祠の祥瑞図

山東省嘉祥県にある武氏祠堂では、近年の調査によって少なくとも三つの祠堂があったことが分かっている。その一つである武梁祠には、二石の祥瑞画像石が使われている。他にもう一石の祥瑞画像石が見つかっているが、これは他の祠堂に当てはまらず、所属が分かかっていない¹⁶⁾。また、この一石には災異としての動物が見え、祥瑞図は武梁祠と同様である。よって、ここでは武梁祠の二石を対象として考察したい。



(1) 祥瑞図 1



(2) 祥瑞図 2

図 2 武梁祠祥瑞図画像石 模本 (林巳奈夫 1989, 附図 47 より作製)

武梁祠では、前後の切り妻屋根にあたる二石に祥瑞図が彫られていた。その屋根の前面の一石(図2(1))は三段に画面が区画され、祥瑞図が列挙されている。また屋根後面の一石(図2(2))は三段に分かれ、上層の二段は祥瑞図、最下層は車馬出行図となっている(図2(2)では最下層は省略)。

これら二石の画像石については前述の『山左金石志』、『金石萃編』、『金石索』等の書物および林巳奈夫・巫鴻(Wu Hung)・田中有ら諸氏がすでに釈文を行っている。新たに明らかとなる祥瑞名もあり、これらの釈文を参照し、再度祥瑞を比定したのが表1である(文末に掲載)。また、図2は林巳奈夫氏の模本を基に、表1の祥瑞や榜題の位置を示したものである。損傷は激しいが、この中で以下のはすでに榜題と『宋書』符瑞志および『瑞応図』との比較からその名が明らかとなっている。

莫莢(前1-A)・黄龍(前1-C)・麒麟(前1-J)・神鼎(前1-K)・浪井(前1-N)・六足獸(前2-G)・白虎(前3-K)・銀甕(後1-A)・比目魚(後1-B)・白魚(後1-C)・比肩獸(後1-D)・比翼鳥(後1-E)・玄圭(後1-F)・壁流離(後1-G)・木連理(後1-H)・赤熊(後1-I)・玉英(後1-J)・玉馬(後1-L)・玉勝(後2-A)・澤馬(後2-B)・白馬朱鬣(後2-C)・渠搜(後2-D)・巨暢(後2-F)など。()内の表記は、表1および図2の位置を示す。

② 和林格爾墓の祥瑞図

和林格爾墓は、一九七一年、内蒙古自治区和林格爾県、東南40kmの新店子の西に流れる紅河北岸で発見された。

紀元一七〇年頃の墓で、高い穹窿頂を持つ前室・中室・後室が中軸線に整列し、前室と後室には側室が附くという、後漢後期の典型的な磚室墓である。全室および墓門と各室をつなぐ甬道には、題記付きの壁画が描かれ、祥瑞図は

表2 和林格爾墓 祥瑞図の配置

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y
		青龍			虎草			禮(禮泉)	神鼎	三足鳥		一角敖(獸)	白狼	鳥	白鶴	白鷓(燕)	比翼鳥	□□	□	圭	玉璜	馬	□□	□□
		黃龍	□龜	冥(夔)莢			木連理	□□	□□	上□□		三角□	□曲□	赤爵	白養(象)	比肩獸	玉羊	□□禽		赤罷	□鳥	白馬		□□
騏驎		靈龜		平露		甘露	浪井	明珠	白鳥	□獸□	白狐		白□				□黑□			金□	銀甕	玉馬		姜元

その他位置不明の祥瑞：玉衣

『和林格爾漢墓壁画』25・34・136・137頁，田中有1984の67・38頁，佐原康夫1991の図33をもとに作成。

中室西壁から北壁にかけて描かれていた。⁽¹⁷⁾

和林格爾墓の祥瑞図については、報告書に釈文および壁画の模本が掲載されているが、釈文は掲載頁によって表記が一定しておらず、模本は縮小したためにかなり見難い。⁽¹⁸⁾

他に田中有氏と佐原康夫氏が、報告書の釈文と模本の画像から題記を検討している。⁽¹⁹⁾ これらを参考にし、画像の配置通りに祥瑞名を提示したのが表2である。

以下、武梁祠の二石と和林格爾墓の壁画を中心に、そしてその他出土した「図解的祥瑞図」から、祥瑞図の比定作業を行う。それによって、まだ明確でない祥瑞図を把握し、後述する「構成的祥瑞図」を理解する一助としたい。

(2) 祥瑞図の比定

『白虎通』封禪では、「徳」がそれぞれ天・地・八表・草木・鳥獸・山陵・淵泉・八方に至る場合に分け、祥瑞の種類を述べる。それらは次のように区別される。

天…斗極明、日月光、甘露

地…嘉禾、萸莢、きまじょう 秬、華平

八表…景星、五緯順軌

草木…朱草、木連理

鳥獸…鳳凰、鸞鳥、麒麟、白虎、狐九尾、白鹿、白鳥

山陵…景雲、芝実、黒丹、蕙莆、器車、神鼎

淵泉…黄龍、醴泉、龍図、龜書、大貝、明珠

八方…祥風、佳氣時喜、鐘律調、音度施、四夷化、越裳貢

その他…賓連、平路

このように分類するのが理想であろうが、いささか分類上困難な点もある。例えば、上記の“天”の斗極明・日月光とは、北斗と北極星および日月が輝くことで、“八表”の景星（巨大な星）・五緯順軌（五星が順に並ぶ）と共に、天象として分類できる。また、“地”およびその他に並べられた祥瑞はみな植物であるが、“草木”の祥瑞となぜ区別されているのか明瞭ではない。また、祥瑞の中には、その性質が具体的に分からないものもある。よって便宜上、①植物、②動物、③器物、④氣象・地象、⑤天象、⑥その他に分け、祥瑞図を見てゆきたい。ちなみに上記の“八方”に含まれた祥瑞は、徳が周囲に及ぶことで陰陽の気が調和され、音律が整い、異民族に及んで風俗が改まり帰属するようになるというものである。氣象に含めることとする。

① 植物

〔嘉禾・嘉麥・嘉瓜〕

嘉禾の画像として名を知られ、かつ明確であるのは、西狭頰摩崖の右側に刻された「五瑞図」の嘉禾図であろう。ここには粟の成熟した穂先がいくつも表現されている（図3）。

武梁祠の前1—H（図2）に見える植物は名前の分からない祥瑞である。これは粟の穂先のような形状を示す。

黄龙

白鹿

君昔在池衍峰嶽之道徳治精通致黄龙白鹿
之瑞故画其像



図3 李翕の西狭頰摩崖「五瑞図」模本
(林巳奈夫 1989, 附図 45)

形状は嘉禾に似ている。文献より嘉禾の特徴を挙げれば、光武帝が生まれた時、舂陵では嘉禾が生えたが、それは一本の茎に九つの穂がついており（一茎九穂）、通常の禾より大きかったという。また、和帝の時にも嘉禾が生え、それも「一茎九穂」であった。⁽²⁰⁾ 前掲「五瑞図」(図3)の嘉禾図には八つの穂が見られるが、原石では最下部の右側の部分が破損しており、恐らくここにも一つ穂が描かれていたのだろう。よって「一茎九穂」が嘉禾の典型的な

表現であったと思われる。以上のことから、穂が多く巨大な武梁祠の前1—Hの画像は嘉禾と推測できるのではないか。

しかしながら、嘉禾の表現には別の表現が存在する。武梁祠祥瑞図の前1—Bには、二本ほどのイネ科の植物が群生する図がある。その榜題には、「……周時……」とあるようだ（表1、前1—B b）。南朝梁の『瑞応図』嘉禾の説明でも、この榜題のように「周時」という表現が用いられ、嘉禾の表現は上記「五瑞図」の嘉禾とはことなる。『瑞応図』には以下のようにある。

嘉禾、五穀の長、盛徳の精なり。文は則ち本を一にして秀を同じくし、質は則ち本を異にして秀を同じくす。

此れ夏殷の時の嘉禾なり。周の時、嘉禾三本は穂を同じくして桑を貫きて生じ、其の穂は箱を盈たす。唐叔の國に生え、以て周公に獻ずれば、曰く、此れ嘉禾なり。大和の氣の生む所なりと。此れ文王の徳たれば、乃ち文王の廟に獻ず。畝を異にして穎を同じくす、之を嘉禾と謂う。（原文は表1、前1—B参照）

つまり、『瑞応図』の説明では、嘉禾は「周時」、三本の苗から一つの穂が生えて桑の木を貫き、その穂は箱を満たすほど巨大であったという。このような苗を異にして一つの穂が生じるといふ様相は、唐の祥瑞鏡の嘉禾に近い（図1）。また、『晋書』五行志では、内史（国相）の呂会が祥瑞を説明して『瑞応図』を按ずるに、根を異にしてを同じくするは、之を連理と謂い、畝を異にし穎を同じくするは、之を嘉禾と謂う」（前注（13）参照）と述べている。このように、西晋末にはすでに「異畝同穎」（苗を異にして穂を同じくする）の、つまり、唐代・祥瑞鏡の嘉禾像ができあがっていた。榜題から見て、図2の前1—Bで植物が群生しているのは、このタイプの嘉禾を表現したと思われる。

嘉瓜については、『続漢書』五行志に「安帝元初三年、瓜の本を異にし共に生ずるもの有り、八瓜蒂を同じくし、

時に以て嘉瓜と為す⁽²¹⁾と記載される。前掲の唐の祥瑞鏡に見えるのが嘉瓜であろうか(図1参照)。蕪のようなものの周囲に、五つの葉が並んでいるが、複数の苗から蒂を同じくして一つの瓜が生じた所を表現しているようである。

〔平露〕

武梁祠の祥瑞図、図2の前1-1には奇妙な形の植物が生えている。幹の天辺には丸いものが付き、幹の左右には傘のようなものがぶら下がる。榜題は「……至」としか字を判別できない。形態が分かる植物は多くはないが、この独特な形の植物に当てはまるのは「平露」ではないだろうか。「瑞応図」には次のように説明する。

平露は蓋の如く、庭に生じ、四方の政の平に似る。王者人を私せず以て官とすれば、則ち四方の政は平らかなり。若し東方の政平らかならざれば、則ち西は低し。北方の政平らかならざれば、則ち南は低し。西方の政平らかならざれば、則ち東は低し。南方の政平らかならざれば、則ち北は低し。四方の政平らかならざれば、其の根は絲の若し。一は曰く、平兩と。平兩は蓋の如く、以て四方王者の政を知り、平らかなれば則ち生ず⁽²²⁾。

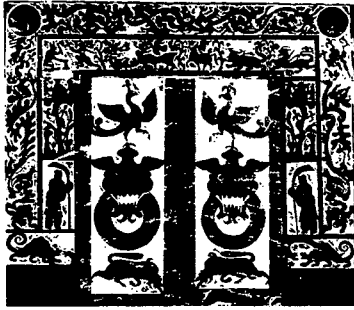
「蓋の如し」という説明と武梁祠祥瑞図の画像は合致している。画像より見れば、一つの蓋ではなく、四方に蓋があるようである。出現の条件としては、王者が私心を加えず適切な人物を官職に任せれば、四方の政治は安定し、平露が生じるというものだ。政治が安定していない方角に合わせて蓋が低く傾くと説明する。後漢中期の『白虎通』にも「平路」とあり、王者が適切な人事を行えば、庭に生じ、また樹木だという。

王者賢をして位を肖えず相い躡えざらしめば、則ち平路は庭に生ず。平路は樹名なり。官位其の人を得れば、則ち生じ、其の人を失わば、則ち死す(『白虎通』封禪⁽²⁴⁾)

榜題がほとんど消えているため、この画像が平露だということは今後の漢代祥瑞図の出土事例を待ち、再検討す

玉芝/芝草 羽人

玉兔



(1) 墓門 拓本 (陝北, 55 頁)



(2) (1) の局部

図4 陝西綏德保育小学墓出土

べきだろう。ただ、「平露」は和林格爾墓の祥瑞図にもあり（画像は不鮮明で確認できない）、両者の祥瑞図には重複した祥瑞図が多いので、可能性は高い。

〔芝英・芝草・朱草〕

図2の前2-Dには、互生に葉の生えた植物が描かれている。榜題には「……英……」とあり、田中有氏は「符瑞志」の記載より、「芝英」の可能性があると指摘する。⁽²⁵⁾「符瑞志」には「芝英は、王者耆老を親近し、養いて道有らば、則ち生ず。」（符瑞志、原文は表1参照）と説明する。

名前からして同じ仲間と思われる植物には、「芝草」がある。『論衡』には、その様相は茎と葉が紫で、葉が三枚、仙人の食べる物で、苗は豆の様だという。

建初三年、零陵泉陵縣の女子博寧の毛に、土中に忽ち芝草五本を生じ、長き者は尺四五寸、短き者は七八寸、茎葉は紫色たれば、蓋し紫芝なり。（験符篇）

芝草は一莖三葉、之を食するに人をして眉壽・慶世にせしむ。蓋し仙人の食する所なり。（佚文）

紫芝の栽は豆の如し（初稟篇）⁽²⁶⁾



図5 四川成都出土 拓本（中国美術全集、図248）

チメートルとして、四捨五入した）。紫芝の苗は豆のようだとも言っている。

紫芝とあるように、芝草には他にも色があったと思われる。伏無忌の『伏候古今注』では、季節によって色が変化すると説明する。

潁川、常に六月中を以て一葉を生じ、五歳にして五重、春（は青）夏は紫、秋は白、冬は黒色、十月の後、黄気の土より出づること五寸。（『伏候古今注』²⁹）

芝草を食べると長生きできるので、仙人の食べる物だろうと王充は言うが、これは恐らく後漢当時一般的な見解であろう。西王母の住む世界には靈草があり、兎が西王母のために葉を作るといふ。張衡は「思玄の賦」で西王母が食べて飢えを癒す靈草を「玉芝」と呼ぶ²⁷。このような条件を持つものが芝草だとすれば、陝北画像石中（図4(2)）に描かれた、西王母の下に生える草や、仙人の持つ三枚葉の植物が該当するだろう。また後漢の伏無忌は、芝は人が冠を被り座しているようだと²⁸も言い、するとこれは四川省成都の西王母画像磚に見られる、兎が持つ鏡餅のような植物を表現しているのだろうか（図5）。また王充は、この芝草は「紫芝」だろうと述べ、背丈は七、八寸（約一七―一九センチメートル）から一尺四・五寸（約三三―三六センチメートル）という（一尺を二三・七五セン



図6 陝西神木大保当 23号墓出土 写真
 (神木大保当, 彩版 16-3, 17-1)

このように青・紫・白・黒を挙げ、葉も三枚に限らず年々増えていく。

河北省望都一号墓東壁下部の題記付き祥瑞図には「芝草」の題記があり、かすかにイネ科植物のような先細りの葉が茎に生えるのが見え、しかも色は赤のようである(『河北古代墓葬壁画』参照)。また陝西省北部の画像石には、画像の余白に武梁祠の芝英のような草が他の祥瑞図とともに描かれることが多い。そのうち、神木県出土の彩色画像石では画面の枠近くに描かれた草に黒い色彩が残る(図6)。これも芝草であろう。



図7 河南洛陽卜千秋
墓前室天井壁画局
部 模本(文物,
1977.6, 図33)



図8 陝西神木大保当20号墓出土局部 写真
(神木大保当, 彩版21-2)

このように見ていくと、武梁祠の芝英の表現は茎に細長い葉が無数に生えるのに対し、王充『論衡』では三枚の葉が生え、苗は豆のようだと言い、表現は一定していない。後漢前期の王充の頃には、まだイメージが確立していなかったようである。

もう一つ似ている植物を挙げるとすれば、それは朱草である。『白虎通』には、朱草は赤色の草で、衣を赤く染めることができ、尊卑を区別するとある⁽³⁰⁾。前漢中期の洛陽卜千秋墓の天井壁画には、兔が朱色の草を持つのが見られる(図7)。陝西省神木大保当、漢墓群出土の彩色画像石のうち、後漢中期から後期の20号墓には、朱色の草が至る所に描かれ、茎の先端には丸い実のようなものが付いている(図8)。このような草は後漢後期の山西省離石馬茂莊2号墓の祥瑞図にも見られ(図9 (1)(2) | aと(3)(4) | a・c)、単独で表現されるのではなく、三足鳥や有翼の馬などに付け加えて描かれる。

② 動物

(黄龍・赤龍・青龍)

武梁祠の表1、前1—Cに描かれるのは黄龍であり(図2の

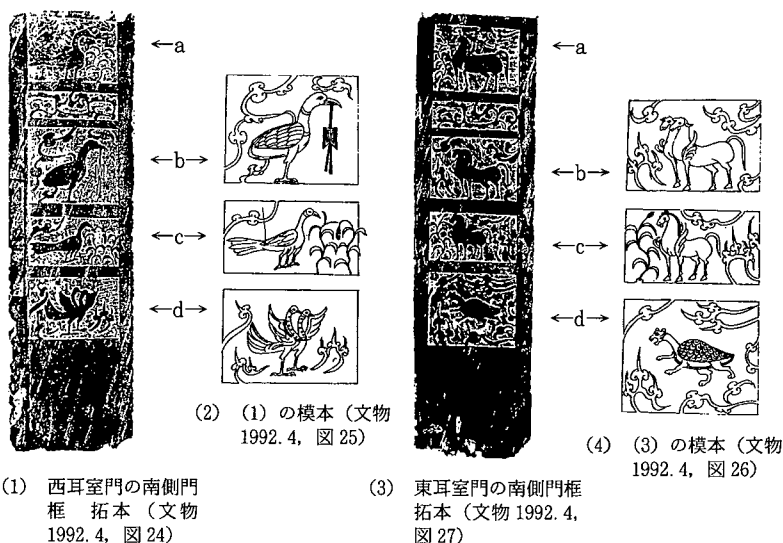


図9 山西離石馬茂荘2号墓出土画像石

前1—C)、榜題の「池を漉して漁に如かざれば則ち、黄龍池に遊ぶ」との記載は「符瑞志」とほぼ同様である。

ところで、ペリオが敦煌で発見した唐代の瑞応図には、彩色画の祥瑞図とその説明が記されている⁽³¹⁾。そこにも「黄龍」の名があり、説明は武梁祠の榜題を含み、「符瑞志」とほぼ同じであった。同時に白龍・青龍・黒龍・神龍も祥瑞として描かれている。恐らく漢代においても、祥瑞として龍はいくつかバリエーションを増やしていたはずである。

例えば、感生帝説や受命の験として龍は緯書に出現している。王符『潜夫論』は含始(高祖の母)が龍に感じて高祖を身ごもったと言い、緯書の『詩含神霧』では更に詳しく赤龍に感じたと言明する。

含始 赤珠を呑むに、尅^{きざ}みて曰く「玉英、漢を生む」とあり、龍女媪に感じ、劉季興る。(『潜夫論』五徳志)

含始 赤珠を呑むに、刻みて曰く「玉英、漢の皇を

生む」とあり、後に赤龍 女媧に感じ、劉季 興るなり。〔芸文類聚〕卷九八引『詩含神霧』⁽³²⁾

このように、漢の勃興を予言する玉英を呑み、赤龍に感応したわけで、緯書を引いた王符の言う龍も赤龍のはずである。赤龍とともに記される「玉英」が武梁祠の祥瑞にあるように（表1のJ）、赤龍も祥瑞と見做されていたであろう。図像としては河南省新安県里河村出土の壁画墓の天井画に、鳳凰・伏羲女媧などとともに黄龍と赤龍が見える。⁽³³⁾

青龍は和林格爾墓の祥瑞図に描かれ、これは武梁祠の黄龍と同じようなポーズを取る。『瑞応図』には青龍の説明があり、「青龍 水の精なり。雲雨⁽³⁴⁾に乗りて上下し、淵泉に處らず。王者に仁有らば、則ち出づ。一は曰く、君子位に在りて斥退⁽³⁵⁾かざれば、則ち見る」と見えるが、黄龍と同様、このような説明が後漢には形成されていた可能性が高い。

〔麒麟・騏驎〕

麒麟については、武梁祠にほぼ完全なまま題記と画像が残っている。この場合「麟」の字で表現されるが、江蘇彭城相繆字墓の画像石では榜題に「騏驎」と記された画像が見える（図10）。この場合、身体が大きく馬のように描かれており、漢代には麒麟・騏驎という二種類が存在していたことが分かる。ちなみにこの一例のみならず、河南滎陽長村墓では、前室北側上部に「騏驎」と書された馬のような祥瑞図が描かれていた。⁽³⁶⁾

〔一角獸・兕⁽³⁷⁾・獬豸⁽³⁸⁾・三角鹿・三角獸〕

和林格爾墓には「一角獸」とあるが（表2の1M）、その形態は具体的には不明である。一角獸としては、麒麟、兕および獬豸が良く知られる。

兕は王逸の「九思」に「虎・兕は廷中に争い、豺狼は我の隅に闘う」と表現されることから、河南の画像石によ

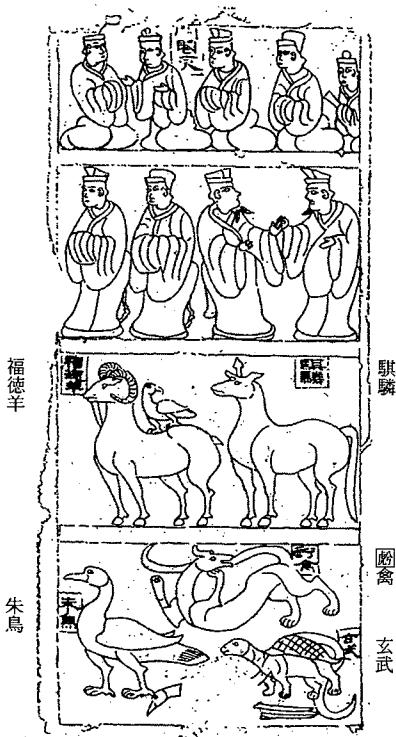


图 10 江蘇彭城相繆宇墓画像石 151 年 模本 (文物 1984. 8, 图 11)



图 12 陝西神木大保当 23 号墓出土 模本 (神木大保当, 图 151)



图 11 河南鄧州梁寨墓出土 拓本 (中原文物, 1996. 3, 图 13)



獬豸 龍 鳳凰 麒麟 比肩獸 辟邪?

図13 陝西綏徳黄家塔6号墓104年 拓本
(考古与文物1988.5・6, 図3-5)



図14 江蘇新沂瓦窯墓出土 拓本(考古1985.7, 図6)

く見られる虎と一角獣が戦う画像だと思われる(図11)。同様な画像は陝西北部の画像石の墓門扉下部にもよく描かれる(図12)。牛の身体で表現されるが、王充は兕を水神として表現し、中国古代の水神は牛の形をとって表現されることが多いため、これを兕と比定するのは妥当ではないかと思われる⁽³⁷⁾。

獬豸については、王充は一角の羊、あるいは熊のようだとも言い、罪があるとそれを察知して角で突くという⁽³⁸⁾。陝西北部の画像石には、熊のような身体をした一角の獣がよく見られ、これが獬豸であろうか(図13)。

また、和林格爾墓には「三角□」という題記もある(表2の2M)。該当するものとしては「三角鹿」があり、伏無忌は「明帝永平九年(『芸文類聚』は永平中に作る)、三角鹿江陵に出づ。両角間に道家七星の符有り、其の祖名・字・郷・里・年月焉に在り。遂に断ちて射獵す」と三角鹿が出現したことについて報告している⁽³⁹⁾。また、『宋書』符瑞志には「三角獸、先王法度もて修めれば則

「ち至る」とあるように、三角獣の可能性もあり、江蘇新沂瓦窯墓出土の画像石で木を突いている獣がそれに当たるところか(図14)。(40)

〔白兔〕

武梁祠祥瑞図の前2―Fには小動物の足が見えるが、欠損がひどく、傍題も「白□□□者□□則至」しか残らない。白い小動物の祥瑞であてはまるのは「白兔」である。「符瑞志」には「白兔、王者敬善老則見」(『宋書』卷29)とあり、表現的には近い。

白兔については、河北望都一号墓東壁にも描かれ、「白兔遊東山」と題記があった。東山については不明だが、当時、白兔が墓地で戯れることは至孝を証明する祥瑞である。(41) そうしてみると、東山というのは邙山のような墓地と関係のある山であろうか。

〔赤鳥銜圭・二足鳥・比翼鳥〕

山西離石馬茂荘2号墓出土の画像石には、祥瑞図がまとまって描かれ、西耳室門の南側門框には鳥の祥瑞図が並ぶ(図9(1)(2)参照)。

まず、図9(1)―aは頭上に翻った羽飾りから鳳凰の類であろう。

次に(1)―bは口に玉を銜えた赤い鳥で、報告書ではこの玉を圭としている。(42) これは恐らく「赤鳥銜圭」を表現したものでらう。「赤鳥銜圭」については早くも『墨子』に記載される。

赤鳥(鳥) 珪を銜え、周の岐社に降る。曰く、「天周文王に命じ、殷を伐ちて国を有たしむ」と(『墨子』非攻下)⁽⁴³⁾

圭を銜えた赤鳥は、天の命を伝える受命の祥瑞を表現する。

(1)―cには三本足の鳥が描かれる。これは「三足鳥」や「三足鳥」と称される祥瑞図であり、和林格爾墓では「三足鳥」と題記のある画像があった。後漢の伏無忌は先の「赤鳥」と三足鳥との関連を説明し、また、至孝に反応して降る祥瑞だと述べている。

所謂赤鳥は、朱鳥なり。其の居る所は高遠にして、日中の三足鳥の精降りて、三足鳥を生ずるなり。何を以てか三足たる、陽数は奇なればなり。是れを以て虞の至孝、三足を其の庭に集まらしむること有り。曾參瓜に鋤し、三足 其の冠に集う。〔伏侯古今注⁽⁴⁴⁾〕

鳥が太陽と関係し、また舜や曾參の「孝の至り」が三足を降したと説明している。この点は『瑞応図』に「三足鳥王者の慈 天地に著けば則ち生ず。鳥は太陽の精なり。亦た至孝の応なり。」とあるように共通している。ほぼ『瑞応図』「三足鳥」の説明に近いものが、後漢すでに形成されていたのであろう。

(1)―dは二羽の鳥が肩で合体したもので、当然「比翼鳥」である。武梁祠の祥瑞図では図2の後1―Eに描かれ、その傍題には「比翼鳥、王者の徳 高遠に及べば則ち至る」(表1参照)とある。

〔沢馬・白馬朱鬣〕

武梁祠の後2―BとC(図2(2))には、沢馬と白馬朱鬣の二種類の馬が描かれる。沢馬については、外見的特徴は分からない。和林格爾墓には「白馬」の題記があり、画像は不明だが、『統漢書』輿服上には「白馬とは、其の鬣尾を朱にそめて朱鬣と為すと云う」⁽⁴⁷⁾とあるように、白馬はたてがみと尾を赤く染めて「朱鬣」とした馬である。祥瑞における「白馬」も「白馬朱鬣」と同様に赤いたてがみを持つ白い馬である。このような馬の例は時代が下るが、十六国の北涼時代の酒泉市丁家閘五号墓前室西壁に見える馬が該当するであろう(図15)⁽⁴⁸⁾。

奇妙な例では、後漢後期に当たる山西離石石盤二号墓の馬の図像が祥瑞図として挙げられよう(図16(2))。前室



図15 白馬朱鬣図 北涼 写真 甘肅酒泉丁家閘5号
墓前室西壁 (墓室壁画, 図44)



(1) 前室東壁南側画像石の題記(2)の拡大 写真「馬頭牛蹄之名浮□(文物2005.2, 図20)



(2) 前室東壁南側画像石写真(文物2005.2, 図25)

図16 山西離石石盤2号墓

東壁南側の画像石には、枠で仕切られた二つの神馬図があり、そのうち下段の画像の枠外に「馬頭牛蹄之名浮□」の題記が記されていた(図16(1))。最後の一字は「浮」字だろうか。浮図や浮屠はブツダの初期の漢訳名であるから、この馬頭牛蹄の動物の名が「浮図」であるとは理解し難い。上の段の馬図は、芝草のような霊草とともに描

かれ(図16(2))、前述の山西離石馬茂荘一号墓の、馬の祥瑞図に表現が近く(図9(3)(4)―a、c)、この馬頭牛蹄の動物も祥瑞図として描かれたのだと思われる。

〔白鹿・白麋〕

後2―Eには鹿の頭が見える。榜題には「□□王……」とあるらしい(表1備考参照)。鹿に該当する祥瑞には『白虎通』に「白鹿」があり、徳が鳥獣に至ったときに出現すると説明される(封禪)。前掲「五瑞図」(図3)の「白鹿」と題された画像から見て、武梁祠の後2―Eは白鹿に近い。また、麋(ノロジカ)の可能性もある。河北省望都一号墓では「鹿章(麋)子」と題記のある動物の壁画が発見された。小さな羽根があることから、これも何らかの祥瑞を示したものでらう。

ちなみに『瑞応図』には、「白麋」と「白鹿」があり、そこに記載される出現の契機は「白麋 王者の徳茂れば、則ち白麋見る」⁽⁴⁹⁾「白鹿 王者 先聖の法度を承けて遺失する所無ければ、則ち白鹿来る」と記される。

〔羊酒・福德羊〕

河北望都一号墓には、甕の横に羊が描かれ、「羊酒」との題記が記されていた。⁽⁵⁰⁾江蘇彭城相繆宇墓には、福德羊との榜題のある大きな羊が描かれる(図10)。

③ 器物

〔玉勝・金勝〕

武梁祠の後2―Aは、画像より「玉勝」には違いないが、榜題が「玉勝、王者……」しか残っていない。玉勝の形状はまさに西王母の髪飾り「勝」の形であり、それは祥瑞と認められ、様々な器物のデザインに利用されている

(小南一郎、一九九一)。玉勝について巫鴻氏は「符瑞志」の「金勝」の説明を対応させている。⁽⁵¹⁾「符瑞志」には次の様にある。

金勝、国盗賊を平らかにし、四夷賓服すれば則ち出づ(『宋書』卷29)

しかし、漢代での玉勝が「符瑞志」の金勝と同じ文言を持ち、後に金勝になったとは考えられない。なぜなら、後漢にはすでに金勝は祥瑞図として存在していたので、当時金勝とは別に「玉勝」に対応する言葉があったはずである。金勝について『風俗通』には次のようにある。

七日の名は為人日、家家は綵を剪り、或は金簿を鏤て人と為し、以て屏風に帖り、亦た之を頭鬢に戴く。今の世、多くは刻みて花勝と為し、『瑞図』金勝の刑(形)に倣る。(古逸叢書、卷1)⁽⁵²⁾

これより、当時既に『瑞図』と呼ばれる祥瑞図の図解書があり、そこに金勝が掲載され、人々が花勝を作る参考にしていたことがわかる。また、緯書『孝經援神契』にもすでに金勝の名が見えている。

孝經援神契曰く、金勝は、人の剋^{ヒキ}る所の勝にして金色たるを象り、四夷來たれば即ち出づ(開元占経卷14引『孝經援神契』)

とあり、ここでも「符瑞志」と同様、金勝は四夷が服属すれば出現すると説明しており、玉勝とは別の祥瑞だと言えよう。唐代の祥瑞鏡には金勝の祥瑞図が見える(図1)。

④ 気象・地象

(甘露)

甘露とは文字通り甘い露が降るといふことである。分かりやすいのは、やはり前掲「五瑞図」中の「甘露」と題

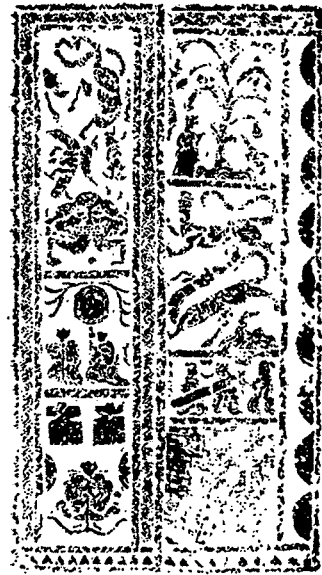


図 17 江蘇徐州青山泉白集墓
拓本 (考古 1981. 2, 図
10-1)

て、まず王充は『爾雅』の「甘露時降、万物以嘉、謂之醴泉」という記載から、甘露は時々降り万物を湿り喜ばせるもので、醴泉と同じとあるのに、当時の儒者が言う祥瑞の甘露と醴泉は別のものであり、儒者の説明には領けな
いとす。そして次のように『爾雅』の「甘露」を定義する。

「雨齏^やみて陰晴^{かげりくもる}は之を甘雨と謂い、雨水の味の甘きを謂うにあらざるなり。此れを推して以て論ずるに、甘露は必ずや其れ降下する時に、適に潤おして万物を養うを謂い、未だ必ずしも露の味甘からざるなり。」(『論衡』是
応篇)

つまり、甘露は本来、適度に万物を潤し養うのを言い、甘い露(儒者の言う祥瑞の「甘露」)ではないと両者を区別する。そして更に「甘い露」の甘露について詳しく説明し、自然現象としての甘露との違いを強調する。

案に、甘露の飴蜜の如き者は、樹木に着き、五穀に着かず。彼の露の味甘からざる者は、其れ下りし時、土地

記の記された画像である。一人の人物が木下に立ち、雨が降っているのかどうか確かめるように手を差し出している(図3)。和林格爾墓にも「甘露」図が題記とともに描かれていたが(表2の3H)、その表現は明らかではない。ここでもう少し甘露の特徴について見てゆきたい。これまで度々引いてきた王充の『論衡』は、祥瑞を否定して論じているため、逆にその祥瑞の特性が分かりやすくなっている。甘露につい

は滋潤流湿し、万物は洽く粘り濡れること溥し。……爾雅の言に縁りて、之を物において験すれば、案に、味甘たるの露 下りて樹木に著き、著く所の樹を察するに、著かざる所の木より茂ること能わず。然らば今の甘露は、殆ど爾雅の所謂甘露に異なるなり。⁽⁵⁶⁾ (卷17是応篇、七六七頁)

王充が言う甘い甘露は、つまり祥瑞の甘露である。そしてそれは樹木に付着すると説明し、これが最大の特徴のようである。ここで再度「五瑞図」の甘露図を見ると、確かに樹木が描かれ、この樹木が甘露の表現で欠かせないことが分かる。

この表現を手がかりに甘露図を求めると、例えば江蘇徐州青山泉白集墓出土の画像石、右上の図が甘露図に該当するだろう(図17)。

⑤ 天象

〔戴日抱月／日月抱戴・老人星〕

後漢後期のものと思われる山東費県潘家疇墓出土の画像には、



伏羲

戴日抱月

図18 山東費県潘家疇墓出土 拓本 (選集, 図426)

上段に伏羲、下段に三角の人物が丸いものを手に持ち、頭に戴く様子が描かれる(図18)。長文の題記があり、「□□閔□」と「此□□／□日也□／戴日抱月／此上下皆□／□(聖人)也」(〃〃は改行、「」内は字は不明確)と書かれていた。⁽⁵⁶⁾ 下の神人について「戴日抱月」と表現しているのは間違いない。これと似た表現が

三国呉の「禅国山碑」に列挙された祥瑞名に見られ、「日月抱戴、老人星見者式十有式」とある。⁽⁵⁷⁾老人星（南極星）については『続漢書』志、礼儀中に、仲秋に老人星を国都南郊の老人廟で祀るとある。⁽⁵⁸⁾また、孫柔之『瑞応図』には、祥瑞として名があり、「王者天の徳を承け理めれば、則ち老人星は其の国に臨む⁽⁵⁹⁾」と説明する。恐らく「日月抱戴」も何らかの天象現象を祥瑞とし、二角の神人として神格化させた図像だろう。

⑥ その他

〔感生帝説〕

武梁祠祥瑞図の後2—h榜題には「……□生后稷」とあり、木の周辺にはひこばえが生え、女性が木に向かい手を伸ばすという動的な場面を描いたものである。后稷を生むと言えば、姜嫄のことであり、次のように記載される。

姜嫄、大人の迹を履み、姫棄（后稷……著者注）を生む。（『潜夫論』五徳志）

周の本は、姜嫄閼宮に遊び、其の地は扶桑たりて、大跡を履み、后稷を生む（太平御覧卷135引『春秋元命苞』⁽⁶⁰⁾）姜嫄は巨人の跡を踏み、后稷を生んだ。この画像は地面の細かな草までが描かれ、強調されている。恐らく武梁祠の姜嫄の画像は、姜嫄がまさに「大人の迹」を踏んだ場面を表現しているのだろう。緯書の『春秋元命苞』では、後漢中期の人王符の『潜夫論』とほぼ同じ説明をしている。後2—Hの榜題（Hb）には『春秋元命苞』の「姜嫄……履大跡、生后稷」というような文章が刻まれていたと思われる。

また、田中有氏が指摘するように、姜嫄のような感生帝説は祥瑞として捉えられていた。⁽⁶¹⁾和林格爾墓の祥瑞図壁画にも「姜元（嫄）」と題記のある画像があり（画像は不鮮明）、祥瑞図の図解書に古代の聖人達の感生帝説が掲載されていたことを裏付ける。

ついでに言うならば、後2—1日にも左手を挙げた女性一人ともう一人の人物が描かれており、榜題は「……帝……」としかないが、これも感生帝説を表現した可能性がある。「帝」の付く名称で言えば、神農(炎帝)・軒轅(黄帝)・堯(赤帝)・舜(帝舜)など多数挙げられる。⁽⁶³⁾ 前述の和林格爾墓祥瑞図の「姜元(嬭)」図の上にも人物画が描かれているが、ここにも同様な感生帝説の画像があった可能性もある。⁽⁶⁴⁾

なぜ感生帝説が祥瑞として見做されていたのか。感生帝説は春秋戦国期の文献に早くも見出せ、伝説の王の驚異的な能力を説明し、王者たる正統性の由来を天の神威に求める効果を果たしていた。だが感生帝説の神秘性がより意図的に明示され、利用されるのは、前漢末から後漢初期の漢の再興を願う人々によって緯書に組み込まれてからである。安居香山氏は、緯書における感生帝説は、高祖の祖父の代まで遡る感生帝説を用意し、高祖の神威を重層的に高めたと指摘する。また、緯書は感生帝説に、相生的五徳終始説を骨子として夏・殷・周・秦から漢まで画一的内容を持たせ、漢王朝を火徳と結び付ける論理を立てたと指摘する。⁽⁶⁵⁾

この五徳終始説に位置づけられた感生帝説は、漢王朝そして後漢王朝の存在を支える上で欠かせない。姜嫄やその他の感生帝説は、受命を伝えた白魚や赤雀が祥瑞であるように、漢世の太平を用意するものとして欠かせない祥瑞と捉えられていたのだろう。

三 祥瑞のイメージ形成と画像の役割——構成的祥瑞図

(1) 吉祥・和氣的表現としての祥瑞図

「構成的祥瑞図」は初期の段階では、他の何かに積極的に働きかけるのではない。屋根の上や樹木の上などの余



図20 江蘇徐州青山泉
白集墓 拓本
(考古 1981. 2,
図 11-5)

とも、単独の画像でそれと明示する「図解的祥瑞図」とは異なり、何も説明されることなく描かれる祥瑞図には、どのような意味があったのであろうか。仲良く寄り添う二羽の鳳凰、戯れる仙獣たち、これらの題材は吉祥図として好んで描かれた。例えば後漢・



図19 山東微山兩城附近出土 拓本
(選集, 図 11)

白に出現することで、周囲の祝福された和やかな雰囲気を表現するよう作用している。例えば山東微山兩城附近出土の画像石では、屋根の上に鳳や二つの人頭を持つ大鳥、猿らしき獣がいるが、屋根の下で交わされる人間の挨拶には無関心のように、関与していない(図19)。

江蘇徐州青山泉白集墓出土の画像石は後漢後期のものである(図20)。最上段には龍のような仙獣があり、身をひねらせて長い尾を咬もうと戯れているようだが、これは前掲江蘇彭城相繆宇墓の画像石に示された最下段の祥瑞と同じものである(図10⁶⁶)。図20の方は構成的祥瑞図だが、その下は線で区切られ、下の世界とは分けられている。下には、屋敷の中で二人の人物が酒を飲み、六博(すごろくのようなゲーム)に興じ、屋根には寄り添う鳳凰、猿がいる。だが、これらの動物たちはごく自然にそこに存在するだけで、下の人間たちには積極的に関わらないのである。

画題や榜題で説明されたり、あるいは文字は無く

鄭衆『鄭氏婚禮』讚言では鳳凰や鴛鴦、羊や鹿などがめでたい言葉だと説明する。

「羊とは祥なり。群れて覚せず、跪いて乳のみし、義有り」、「鳳皇、雌雄伉合す」、「鴛鴦、鳥なり。雌雄相いらし、飛止相い匹ないて鳴かば、則ち和す」、「鹿とは禄なり」⁽⁶⁷⁾

描かれる画像には言わずもがなの意味があり、このような動物たちの情景は言葉として表現されるだけでなく、描かれもしたのである。

このような画像中において積極的に作用することなく、余白に空気のように存在する祥瑞図は、實際漢代の祥瑞の招来に関する考え方に共通して見られる概念を表現したものと思われる。例えば、前漢中期の儒者・董仲舒は、天が持つ、人格を有した宗教的神格性を重視し、その天が人（天子）と相関して、天子の行為の善悪に応じて祥瑞或は災異を下すと考えた⁽⁶⁸⁾。後にその思想がまとめられた『春秋繁露』には、祥瑞出現のメカニズムについて次のように説明する。

春秋何ぞ元を貴びて之を言うや。元とは、始なり、本の正しきを言うなり。道は、王道なり。王とは、人の始めなり。王正しければ、則ち元氣は和順し、風雨時あり、景星見れ、黄龍下る。⁽⁶⁹⁾『春秋繁露』王道

当然論理としては、王（天子）の行いの善悪に相応して祥瑞は出現する。だが天子の行為と天の反応との間に介入するのは和順した元気で、それが祥瑞をもたらすと考えている。この考えは『白虎通』にも見られる。

天下太平たりて、符瑞の来て至る所以は、以為らく、王者は天を承け理を統べ、陰陽を調和し、陰陽和すれば、萬物は序いじ、休氣は充塞し、故に符瑞は並び臻り、皆徳に應じて至るなり。⁽⁷⁰⁾『白虎通』封禪

ここでも、天に働きかける主体者は王（天子）であるが、その構造は王者が天の意に従い条理を治めて陰陽を調和させることで、万物は分に応じて並び、めでたい気が充満して感応し、祥瑞が出現するといふものである。

上記の二つは、前漢後期から後漢の祥瑞に関する代表的見解である。一方、祥瑞を否定し、天の人格性および天と人との感應を否定した後漢の王充は、次のように祥瑞の仕組みを把握している。

夫れ鳳皇騏驎の至るや、猶お醴泉の出で、朱草の生ずるがごときなり。……醴泉・朱草は、和氣の生む所にして、然らば則ち鳳皇・騏驎も亦、和氣の生む所なり。物生じて瑞と為り、人生じて聖と為り、同時に俱に然りて、時に其れ長大し、相い逢遇せり。衰世も亦た和氣有り、和氣は時に聖人を生ず。聖人は衰世に生じ、衰世も亦時に鳳・騏有るなり。(『論衡』指瑞篇⁷¹)。

王充は鳳皇・麒麟と醴泉・朱草に關係なく、祥瑞は氣が和して生じたもの、という考えである。天と人(聖人・天子)の相關關係については、祥瑞と聖人がたまたま生じて出会ったとして否定する。そして儒者が祥瑞を太平の世に限定するのに対し、太平の世だけでなく衰世でも和氣すれば生じると断言する。

つまり、天人間の感應を認めるか否かは大きく異なるとしても、祥瑞が生じる原理は氣の調和ということである。後漢の中期に増加してくる祥瑞図のうち、余白に集い戯れ、他の画像構成要素に作用しない祥瑞図は、まさに陰陽の調和を表現している。

(2) 「構成的祥瑞図」の変化

先に説明した「構成的祥瑞図」は後漢的な太平を表現したものである。つまりそれは人間世界の空間的な調和で表現される。このような表現と同時に、後漢後期には、このような構成的祥瑞図の中に、他の画像要素に積極的に働きかける祥瑞図がいくつか見られるようになる。

江蘇新沂瓦窯墓は後漢の画像石を再利用したと見られる墓であるが、この墓より出土した図14の画像石は、斗拱



図21 江蘇徐州銅山大廟墓出土 拓本
(文物 2003. 4, 図10)



図22 山東臨沂白莊墓出土 拓本 (全集3, 図32)

が二股に分かれて表現されていることから、後漢後期の画像石と思われる。⁽⁷³⁾ 屋敷には墓主らしき人物がおり、酒を酌み交わしているようだ。外には龍らしき動物がおり、右手の木の周囲には鳥が飛び交い、これまで見たような和気の表現を見せている。ただ一つ注目されるのは、樹木の右下に描かれる三角の獣(「三角獣」)が樹木を突こうとしている点である。ここでは祥瑞図がただ余白に描かれるだけでなく、他の主要な画像要素と関わりを見せている点がこれまでの構成的祥瑞図とは異なる。

次に、後漢後期の江蘇徐州銅山大廟墓出土の画像石では、家屋の中に男女と思われる二人の人物が仲睦まじく寄り添い、外にはやはり樹木が見える(図21)。木の下には人が立ち、片手を差し伸べるが、前節で確認した通り、これは「甘露」を表現した祥瑞図である。樹木と家屋建築物は結びつきが強く、墓葬装飾の主要な画像要素であることから(菅野恵美、二〇〇七)、この画像石は、祥瑞図が具体的にそれら主要な画像要素と結びついた

だ余白に描かれるだけでなく、他の主要な画像要素と関わりを見せている点がこれまでの構成的祥瑞図とは異なる。



(1) 前室西壁北側立柱 (2) 墓門中央西側門楣

図23 山東莒県沈劉莊墓出土 拓本
(考古1988.9, 左から図11, 図6-2)

例である。

山東臨沂白莊墓より出土した画像石では、中央の樹木の下で巨大な鳥が首をもたげ、その嘴は綬（リボン）を銜え、それを右端の人物に見せているようだ（図22）。綬は印に結びつけるものであり、官位によって色は異なる。この大鳥の綬には何か丸いものが付いており、それは左端に立つ人物が懐から垂らしているものと同様である。漢代の官吏は綬を腰に括りつけ、印を携えていたので官印にも

見える。⁽⁷⁴⁾だが、丸い珠を付けた綬の表現は、この地域に多々見え、官印ではないようだ（図23(1)）。通常、珠や綬を銜えた鳳凰が多く見られるため、この山東臨沂白莊墓の画像石は綬と玉を合体させた表現と言えよう。林巴奈夫氏は、綬や珠は古音が「寿」に通じるため、鳳凰が長寿をもたらす意味を込めたものと指摘する。⁽⁷⁶⁾

ただ図22で問題となるのは、この珠つきの綬を銜えた大鳥がこの図中の人物に珠・綬という徴しるしをもたらすという、具体的な働きかけをしていることである。祥瑞の比定で確認したように、赤鳥や朱雀が飛来して玉をもたらすという行為は、天からの命を象徴するものであった。鳥はもともと超自然的な神の意思を伝える存在と見做されていた動物であり、そのような例は多々ある。⁽⁷⁶⁾この画像は鳥が天より寿を運んできたという天から人への具体的アプローチ

チを示したものと云えよう。

次のような例もある。山東莒県沈劉莊墓出土の画像石では、上空に鳥が飛翔し、その下には網を手にした人物がこの鳥を捕らえようとしている（図23(2)）。この鳥は扇状のものがついた紐を銜えている。形から判断して、これは瓊であろうか。瓊は璧を三分の一分分した形の玉である。和林格爾墓の祥瑞図には「玉瓊」の名が見えている（表2の1V）⁽⁷⁾。この図は祥瑞を捕らえようとしている場面なのだろう。

このような構成的祥瑞図の変化は何を意味しているのだろうか。もともと吉祥を示すものとして民間に存在していたであろう、動物や植物の奇異な生態は、緯書とともに祥瑞として定義され、凶解書が流布することで図像として確立し、明確で強いメッセージ性を持ったであろう。祥瑞図が墓主や祭祀など、墓葬装飾の主要な題材とより積極的に結びついて表現された時、祥瑞は単に漢の受命の正統性や太平を謳うのではなく、墓主やその子孫の徳性を強調する作用を果たす。

例えば、三国呉の朱然墓から出土した蜀製の漆盤には、歴史故事の「季札掛劍」図が描かれていた（画像については『文物』一九八六・三の彩色挿頁貳—1参照）。後漢の季札掛劍図がこれとほぼ同じ体裁を取り、墳丘と冢上の木、および木に掛けられた長劍とそれを祀る季札らしき人物で表現されることは別稿で論じたところである（菅野恵美、二〇〇七）。この漆画では更に、墳丘近くに二羽の白兔が描き足されている。前節で触れたように、白兔は子が親のために墓を築いた際、至孝に感応して出現する祥瑞だ。この季札掛劍図は、墳丘というこの図にとって不可欠な図像の近くに、これまた墳丘を連想させる祥瑞の白兔を配することで、両者はより緊密に合体し、白兔は季札の徳の高さを際立たせるよう作用しているのである。

このようなイメージの重ねあわせの例は、祥瑞以外にも挙げられる。後漢末期の人、趙岐は絵を得意として生前

に墓を掘り、自ら墓室に絵を描いたという。

後漢の趙岐、字は邠卿、京兆長陵の人なり。才芸を多くし、画を善くし、自ら寿藏を郢城に為し、季札・子産・晏嬰・叔向の四人を画き、賓位に居さしめ、自ら主位に居し、各讚頌を為す。献帝建安六年、官は太常卿に至る。〔歴代名画記〕卷4⁽⁷⁸⁾

このように季札らを賓位に、自分を主人の席に描いた。つまり、歴史上の賢人達とともに自己を並べて描き、自らをそのような賢人に重ねあわせたのである。

祥瑞図を画中に作用的に組み合わせるといふ行為の背景には、どのような思想的变化があるのだろうか。祥瑞といふものが基本的に天が天子（王者など為政者）の行為に感応したプラスの徴であると考えられていたことは先に述べた。だが、この見解にも変化が見られる。後漢桓帝の皇后（竇皇后）の父である竇武は、党錮の後の永康元年（二六七年）、皇帝に宦官の専横を諫めた際に、次のように祥瑞について述べている。

……其の無状誣罔の罪を案じ、忠良を信任し、臧否^(くちあし)を平決し、邪正・毀誉をして、各其の所を得さしめ、天官を宝愛して、唯だ善のみ是れ授くべし。此の如くすれば、咎徴は消える可く、天応は待つ可し。間者^(まげ)、嘉木・芝草・黄龍の見るること有り。夫れ、瑞の生ずるは必ず嘉士に於いてし、福の至るは実に善人に由り。徳に在りて瑞と為り、徳無くして災と為る。陛下の行う所、天意に合せざれば、宜しく慶と称すべからず。〔後漢書〕

卷69、竇武伝⁽⁷⁹⁾

無状誣罔（無実で濡れ衣）の罪を勘案し、誠実な者を信任して善悪を定め、邪と正直な者、そしりや褒めたりした者たちを相応に処置し、天の人事を信奉して、善なるものを任命すれば、天の咎めの徴は消え、天の応を待つことができよう、ということである。そして最近現れた祥瑞について言及し、善人（嘉士）に祥瑞が訪れ、福が来ると

言うのである。明らかに天応の対象が為政者ではなく、善人という一般にまで広げられている。

佐原康夫氏は、後漢の人士の中に至孝や至徳の行為が天を感応させるという信心が形成されたと指摘する（佐原、一九九一）。恐らく、このような信心は後漢の人士が信奉していた「三命説」と関係している。これは、天命を三つの①寿命②随命③遭命に分けた説である。寿命は与えられた命をまっとうすること、遭命は善行にも関わらず不幸に遭うこと、随命は善悪に応じて禍福が降ることであり、緯書に「三命」の形を採り出現し、後漢には定着した⁽⁸⁰⁾。遭命という天の下での制限はあるものの、特に随命のように自己の主體的な行為が、自己の上昇（あるいは下降）を決定するという思想がここに見られる。

次の馮衍の言は、自己の孝を始めとした修養が、仙人のような超自然の力を享受するのに繋がると考えている一例である。馮衍は王莽政権に仕官せず更始側に付き、義に厚かったために遅れて後漢に仕官したが、謗りなどで志を得なかった人物である。

年は衰え歳は暮れ、功を成すこと無きを悼^{いた}み、将に西して肥饒の野に田牧し、生産を殖し、孝道を修め、宗廟を営み、祭祀を広くせんとす。然る後に門を闔^とじ道徳を講習し、孔老の論を観覽し、松喬の福を庶^{こゝろ}幾わん。
〔後漢書〕卷28下、馮衍伝⁽⁸¹⁾

松喬とは仙人の赤松子と王子喬のことである。

また、後漢中期から後期の人、王符（八五年頃―一六三年頃）はその著書『潜夫論』で、人間を上智・中庸・下愚に分類し、中庸の人が修養を積むことで賢人にまで至ると述べる。

布衣なるもの有り。積善して怠らざれば必ず顔・閔の賢に致る。積悪して休まざれば必ず桀跖の名を致す。ひとり布衣にのみに非ず。人臣もまた然り。〔潜夫論〕慎微⁽⁸²⁾

この王符の天人観について堀池信夫氏は、賢人ひいては聖人までもを修養に努めることで体得したものと見做し、人間の先天的なものではなく、主体的行為を重視し、天の絶対性へ懐疑の目を向け、人の天からの自立性を認められた点に注目している。⁽⁸³⁾ 逆に人間から天への働きかけを可能とする足場を与えているのである。

そして後漢後期の蔡邕の「祖徳頌」に至ると、次のようにはっきり祥瑞と人間の行為・積善との関係を歌い上げる。

昔文王始めて受命し、武王は禍乱を定め、成王に至り、太平たること乃ち治くし、祥瑞は畢に降る。……是以て易は積善に餘慶有るを嘉し、詩は、子孫は其れ之を保たんと称し、特に王道のみ然るに非ざるなり。賢人君子は、仁を修め徳を履む者たれば、亦た其れ有るなり。昔我が列祖、予の考に暨ぶまで、世孝友を載し、重んずるに明德を以てし、礼に率いて違ふこと莫く、是に以て靈祇い、之に休瑞を降らす。免は擾馴て以て其の仁を昭らかにし、木は連理して以て其の義を象る。斯れ乃ち祖禰の遺せし靈たりて、盛徳の呪う所なり。

(芸文類聚卷20、人部、孝引蔡邕「祖徳頌」)

ここでは、祥瑞は易や詩経にも記されているように王道だけにあてはまるのではなく、仁徳を積んだ賢人君子にも祥瑞は下るのだとして、祖先のために来た祥瑞を挙げています。つまり蔡邕は自分の祖先を賢人君子とし、祥瑞を招来する盛徳を持つと言う。

冒頭で触れた「五瑞図」には、黄龍・嘉禾・木連理・甘露・白鹿の祥瑞図が描かれていたが、その題記には、漢の武都の太守である李翕が、かつて峭山の険峻な難所を整地したことで、徳が通達感応してこれらの祥瑞をもたらしたと記される。⁽⁸⁵⁾ これら祥瑞図は、徳の修養が人を賢人に近づかせ、天の感応を可能するという上述のような觀念のもと、当然の物として描かれているのであろう。

おわりに

以上、祥瑞図の比定から始まり、その図像的役割について考察した。祥瑞図は、図解的祥瑞図と構成的祥瑞図に大別できる。図解的祥瑞図は祥瑞を明示し、説明を加えたものである。祥瑞は緯書に組み込まれ、後漢王朝を正当化するものとして定義付けられ、図解書として示されることでその象徴性を増した。また、図解書の流布は、ほぼ共通のイメージを後漢の広い地域で共有する結果をもたらしたものと思われる。一方、構成的祥瑞図は単独ではなく他の図像とともに画像を構成するものである。それは宇宙や神仙世界を示したり、あるいは吉祥図として、祥瑞図に収斂される以前にすでに親しまれていたであろう。だが後漢になると、それは特に墓葬装飾の主題でもある墓主の描かれる空間（家屋建築物・樹木・狩猟図など）に組み込まれることで、祥瑞がもたらされる条件である太平の和気表現するようになる。そしてさらに墓葬装飾の主要な要素に作用的に描かれることによって、祥瑞がただ単に漢世を認めて太平を謳歌しているのではなく、墓主・祖先や子孫の徳性を賞賛するために描かれていることが理解できる。祥瑞はこのようなイメージを何重にも重ねて意味を与えることに成功しているのである。

佐原氏の武氏祠堂画像石の研究では、特に歴史故事図を考察し、天人感応の天子から個人への広がり論じた（佐原康夫、一九九一）。本論では、祥瑞図の描かれ方に着目した。本論で指摘した上述のような祥瑞図表現の変化は、祥瑞出現の条件に対する考え方の変化に現れている。祥瑞は天子だけでなく、個人にも感応して下るものとなった。これは徳の修養や積善といった個人の主体的行為が、個人を賢人に至らしめることを可能とした思想と大きく関係しているものと思われる。

そして天と個人との関係は、個人へ興味が移ったということ、地域の成熟、王朝の弱体化、などで絶対的な天が失われていったことと無関係ではない。

注

- (1) 安居香山、一九八八、二〇二—三頁。
- (2) 保科季子二〇〇五、八〇—八七頁。
- (3) 保科季子二〇〇五、九四—九八頁。
- (4) 安居香山、一九七九、後編「第三章 感生帝説の展開と緯書思想」では、漢が堯の後裔であるという説は、遅くとも前漢昭帝期の睦弘の発言（董仲舒に仮託する）まで遡れ、『漢書』高祖伝の贊にも言及されると指摘する（四三三—四三五頁）。高祖に関する緯書の作成については、安居香山、一九七九、後編「第四章 図讖の特性についての考察——前漢高祖関係資料を中心として」を参照。
- (5) 「孝明時雖無鳳皇、亦致麟・甘露・醴泉・神雀・白雉・紫芝・嘉禾、金出鼎見、離木復合。五帝・三王、経伝所載瑞応、莫盛孝明。」（『論衡校釈』宣漢編、八二〇頁、中華書局、北京、一九九〇年。以下、同書を参照する。）
- (6) 「論曰……在位十三年、郡国所上符瑞合於圖書者、数百千所」（『後漢書』卷3、章帝紀第3、一五九頁、中華書局、北京、一九六五年。以下同書を参照する。）
- (7) Wu Hung, 1989, p. 91.
- (8) 陳槃、一九四八、六八頁。
- (9) Wu Hung, 1989, pp. 76—77では、前漢において漆器や金属器に祥瑞が偏在するようになり、後漢になると、画像石（墓葬裝飾）という形態で頻出すると指摘する。
- (10) 『山左金石志』卷七（『石刻史料新編』19）、『金石萃編』卷21（『石刻史料新編』1、新文豊出版公司、台北、一九七七年。以下、同書を参照する。）
- (11) 『金石索』下、一四七七一—一五〇〇頁、台聯国風出版社、中文出版社、一九七四年。以下、同書を参照する。
- (12) 題記については小島祐馬、一九三三参照。画像については松本栄一、一九五六に見える。

(13) 「愍帝建興四年（三二六年）、……時内史呂会上言、「按『瑞応図』、異根同体謂之連理、異畝同穎謂之嘉禾」『晋書』卷29、志第19、五行下、九〇九頁、中華書局、北京、一九七四年。以下、同書を参照する。

(14) 『隋書』『経籍志』には瑞應圖二卷、瑞圖讀二卷、祥瑞圖十一卷、侯亶撰祥瑞圖八卷、芝英圖一卷、祥異圖十一卷、災異圖一卷などがあり、『新唐書』『藝文志』には孫柔之瑞應圖記三卷、熊理瑞應圖讀三卷、顧野王符瑞圖十卷、祥瑞圖十卷などが挙げられる。

(15) 陳榮、一九四八、六六頁。また、漢代以降、『瑞応図』と名のつくものだけで、最大8種を挙げる（同前、七二頁）。

(16) 武氏祠堂画像石の配置については蔣英炬・吳文祺、一九九五参照。

(17) 以上、『和林格爾漢墓壁画』参照。

(18) 『和林格爾漢墓壁画』、二五頁と三四頁の題記は表記が多少異なる。一三六・一三七頁には祥瑞図の模本が載るが、小さくしかも白黒である。

(19) 田中有、一九八四、六六一―六八頁。佐原康夫、一九九一、図33。

(20) 『東観漢記』には「建平元年十二月甲子夜帝生時……是歳有嘉禾生、一莖九穗、長大于凡禾。縣界大豐熟、因名帝曰秀」とある（『東観漢記校注』巻1、紀1、光武帝、一頁、中州古籍出版社、鄭州、一九八七

年。以下、同書を参照する）。また、後漢伏無忌『伏侯古今注』には、「和帝元年、嘉禾生濟陰城陽、一莖九穗。」とある（『玉函山房輯佚書』4巻、二八四四頁、中文出版社、京都、一九七九年。以下、同書を参照する）。

(21) 『統漢書』、五行志「安帝元初三年、有瓜異本共生、（一）「八」瓜同蒂、時以為嘉瓜」（『後漢書』、志第14、五行2、三二九八頁）。

(22) 「平露者如蓋、生於庭、似四方之政平。王者不私人以官、則四方之政平。若東方政不平、則西低。北方政不平、則南低。西方政不平、則東低。南方政不平、則北低。四方政不平、其根若絲。一曰平兩。平兩者如蓋、以知四方王者政、平則生。」（『玉函山房輯佚書』4巻、孫柔之『瑞応図』、二一九七頁）

(23) 『宋書』巻29 符瑞下では、平露が方角に合わせて「傾く」と説明する。

(24) 「王者使賢不肖位不相踰、則平路生庭。平路者樹名也。官位得其人則生、失其人則死」（『白虎通疏證』封禪、二八六頁、中華書局、北京、一九九四年。以下、同書を参照する）。

(25) 田中有、一九八四、六四頁参照。

(26) 『論衡』「建初三年、零陵泉陵縣女子博寧宅、土中忽生芝草五本、長者尺四五寸、短者七八寸、莖葉紫色、蓋紫芝也。」（驗符篇、八四〇―八四二頁）、「芝草一莖

三葉、食之令人眉壽慶世。蓋仙人之所食。」(佚文、一一二四頁)、「紫芝之栽如豆」(初稟篇、二二八頁)。

(27) 「聘王母於銀臺兮、羞玉芝以療飢」(『後漢書』列伝第49張衡、思玄賦、一九三〇頁)

(28) 「元和二年芝生沛、如人冠大坐狀」(『伏侯古今注』、『玉函山房輯佚書』4卷、二八四四頁)

(29) 「潁川常以六月中生一葉、五歲五重、春(青)夏紫秋白冬黑色、十月後黃氣出土五寸」(『伏侯古今注』、『玉函山房輯佚書』4卷、二八四四頁)。但し『芸文類聚』は、「春」は「青」とする。

(30) 「朱草者、赤草也。可以染絳、別尊卑也。」(『白虎通疏證』封禪、二八七頁)。

(31) 釈文については、小島祐馬、一九三三、一一五一—二〇頁参照。

(32) 「含始吞赤珠、尅曰「玉英生漢」、龍感女媧、劉季興。」(『潜夫論箋校正』、五德志、三九〇頁、中華書局、北京、一九八五年。以下、同書を参照する)。「含始吞赤珠、刻曰「玉英生漢皇」、後赤龍感女媧、劉季興也。」(『芸文類聚』卷98、祥瑞部上、龍、一七〇三一—一七〇四頁、中華書局、北京、一九六五年。以下、同書を参照する)。

(33) 『文物』二〇五・三、図2・5。

(34) 『玉函山房佚輯書』、4卷二九八二頁参照。ただし、ペリオの敦煌本瑞応図では、青龍の説明に「孫氏瑞応

図」を引き、「乘龍」を「乘雲雨」に作る。こちらの方が意味が通るため、敦煌本によって後者に訂正した。

(35) 『文物』一九九六・三、一九頁および図15参照。

(36) 王逸の九思、「虎兇争兮于廷中、豺狼鬪兮我之隅。」(『楚辞補注』九思章句第17、逢尤、三二五頁、重印修訂本、中華書局、北京、二〇〇二年。以下、同書を参照する)。

(37) 王充は『論衡』是応篇で「師尚父為周司馬、將師伐紂、到孟津之上、杖鉞把旄、号其衆曰『倉(蒼)兇、倉(蒼)兇』。倉兇者、水中之獸也、善覆人船。」(『論衡校釈』是応篇、七六二—七六三頁)と述べる。つまり呂尚が周の司馬となり、兵を率い紂を討つ際に、孟津の渡し場で蒼兇が来るぞ、と民衆に呼びかけ、注意を促したという。水神が牛の姿を取ることにについては石田英一郎、一九九四を参照。

(38) 「儒者説云、魍魎(獬豸)者、一角之羊也、青色四足、或曰似熊、能知曲直、性知有罪。……有罪則觸之、無罪則不觸。」(『論衡校釈』是応篇、七六〇頁)。

(39) 「明帝永平九年(芸文類聚作永平中)、三角鹿出江陵。兩角間有道家七星符、其祖名字鄉里年月在焉。遂断射獵」(『伏侯古今注』、『玉函山房輯佚書』4卷、二八四五頁)

(40) 「三角獸、先王法度修則至」(『宋書』卷28、志第18、符瑞中、八〇七頁、中華書局、北京、一九七四年。以

下、同書を参照する。

- (41) 「後漢方儲、字聖明。遭母憂、負土成墳、松柏數十株。鸞鳥棲其上、白兔遊其下。」〔芸文類聚〕卷88木部上、柏、一五一五頁。「邕性篤孝、母常帶病三年、邕自非寒暑節變、未嘗解襟帶、不寢寐者七旬。母卒、廬于家側、動靜以礼。有苑馴擾其室傍、又木生連理、遠近奇之、多往觀焉。」〔後漢書〕卷60下、蔡邕列伝第50下、一九八〇頁。

- (42) 『文物』一九九一・四、二四頁。

- (43) 「赤鳥銜珪降周之岐社、曰天命周文王伐殷有国」〔墨子問詁〕卷5、非攻下、二四—二五頁、『墨子問詁』、漢文大系14、富山房、東京、一九二三年。以下、同書を参照する。

- (44) 「所謂赤鳥者、朱鳥也。其所居高遠、日中三足鳥之精降、而生三足鳥。何以三足、陽數奇也。是以有虞至孝、三足集其庭。曾參鋤瓜、三足集其冠。」〔伏侯古今注〕、『玉函山房輯佚書』4卷、二八四—二八四五頁。

- (45) 舜や曾參の至孝の話は、武氏祠堂画像石など漢代の孝子図に近い内容を持つといわれる陽明本『孝子伝』に詳しいが、三足鳥を招来したとの話は無い。曾參の「鋤瓜」とは、『孝子伝』によれば父母とともに蒞畑を鋤いていた曾參は、誤って一株を損い、怒った父親は參を叩き、參が頭から血を流すのを見て憂い後悔した

が、曾參は琴を演奏して父親を逆に慰めたという話である。「与父母共鋤瓜、誤傷一株。叩其父頭」(注では「父」字の位置を誤るか、とする。括弧内は著者注)見血恐、父憂悔。乃弹琴自悦之。是一孝也。」〔孝子注解〕、一九九頁、二〇六頁注6、汲古書院、東京、二〇〇三年。以下、同書を参照する。

- (46) 「三足鳥王者慈著天地則生。鳥太陽之精也。亦至孝之心。」〔瑞応図〕、『玉函山房輯佚書』4卷、二九七八頁。

- (47) 『統漢書』、輿服上「白馬者、朱其鬣尾為朱鬣云」〔後漢書〕、志第29、輿服上、三六四頁。

- (48) 『墓室壁画』図四四。

- (49) 「白鸞 王者德茂、則白鸞見」「白鹿 王者承先聖法度無所遺失、則白鹿來」〔瑞応図〕、『玉函山房輯佚書』4卷、二九七九頁。

- (50) 『河北古代墓葬壁画』。

- (51) Wu Hung, 1989, p. 243 参照。

- (52) 「七日名為人日、家家剪綵或鏤金簿為人、以帖屏風、亦戴之頭鬢。今世多刻為花勝像瑞圖金勝之刑。」〔古逸叢書〕

- (53) 「孝經授神契曰、金勝者、象人所剝勝而金色、四夷來即出、緯書集成卷5、四七頁を参照したが、適宜句点を変えている〔重修緯書集成〕、明德出版社、東京、一九七二—一九八八年。以下、同書参照。

(54) 「雨露而陰暍者謂之甘雨、非謂雨水之味甘也。推此以論、甘露必謂其降下時、適潤養万物、未必露味甘也。」
〔論衡校釈〕是応篇、七七七頁。

(55) 「案甘露如飴蜜者、着於樹木、不着五穀。彼露味不甘者、其下時、土地滋潤流濕、万物洽粘濡溥。……緣爾雅之言、驗之於物、案味甘之露下著樹木、察所著之樹、不能茂於所不著之木。然今之甘露、殆異於爾雅之所謂甘露。」〔論衡校釈〕是応篇、七七七頁。

(56) 〔選集〕 図426参照。

(57) 本文は『全三国文』卷75、闕名、「禪国山碑」一四五七—一四五八頁（『全上古三代秦漢三國六朝文』、中華書局、北京、一九五八年）に見られる。句点は陳槃、一九四八、六九頁によった。

(58) 「是月也、祀老人星于國都南郊老人廟。」〔統漢書〕、礼儀中（『後漢書』志第5、三二二—三四頁）。

(59) 「王者承天德理、則老人星臨其国」〔玉函山房輯佚書〕4卷、〔瑞応図〕、二九七一頁。

(60) 「姜嫄、履大人迹生姬棄。」〔潜夫論箋校正〕五德志、三八六頁。「春秋元命苞曰、周姜嫄遊閼宮、其地扶桑、履大跡、生后稷」〔太平御覽〕卷135、六五五頁、中華書局、北京、一九九八年（重印）。以下、同書参照。

(61) 田中有、一九八四、六七—六八頁参照。

(62) 林巴奈夫、一九八九、二〇一頁、標題「……帝……」

の画像の説明参照。

(63) 神農については「任巳（妘）感龍生帝魁（＝神農）」〔孝経鈞命決〕、『緯書集成』卷5、六七頁）、軒轅は「大電繞枢昭野、感符玉、生黄帝軒轅。」〔潜夫論箋校正〕、五德志、三九〇頁）、堯は「慶都與赤龍合昏（婚）、生赤帝伊祁、堯」〔詩含神霧〕、『緯書集成』卷3、二三頁）、「後祠慶都、與龍合婚、生伊堯。」〔潜夫論箋校正〕、五德志、三八九頁）、舜については「握登見大虹、意感而生帝舜。」〔詩含神霧〕、『緯書集成』卷3、二四頁）などがある。

(64) 田中有、一九八四、六八頁で指摘するように、和人格爾墓の歴史人物画にも「姜嫄」は描かれるが、その他「契母簡狄」「王季母大姜」「文王母大任」「武王母大妘」などの題記を持つ人物もあり、これらの感生神話も祥瑞に含まれていた可能性がある。

(65) 木火土金水の五徳それぞれに相応して、感生の際の契機、受命を知らせる動物の色などが画一化されている。安居香山、一九七九、「第三章 感生帝説の展開と緯書思想」参照。

(66) この題記には「□禽」とあり、報告書では判読不明の部分で「虎」「兮」から成る字か、と見ている（『文物』一九八四・八）。

(67) 後漢・鄭衆『鄭氏婚礼』讚言「羊者祥也。群而不党。跪乳有義」〔鳳皇雌雄伉合〕、「鴛鴦、鳥。雌雄相類。

飛止相匹鳴則和」、「鹿者祿也」(『玉函山房輯佚書』2巻、八三四・八三五頁)。

(68) 池田知久、一九九四参照。董仲舒が言う「人」とは「天子」などの為政者に他ならないこと、および董仲舒が天の二面性「人格を持つ宗教的主宰者」「人格を有しない機械的な自然としての天」を主従関係で捉えていたと指摘する。

(69) 「春秋何貴乎元而言之。元者、始也、言本正也。道、王道也。王者、人之始也。王正則元氣和順、風雨時、景星見、黃龍下。」(『春秋繁露義證』王道、一〇〇—一〇一頁、中華書局、北京、一九九二年。以下、同書参照)。

(70) 「天下太平、符瑞所以來至者、以為王者承天統理、調和陰陽、陰陽和、萬物序、休氣充塞、故符瑞並臻、皆應德而至。」(『白虎通疏證』巻6、封禪、二八三頁)。
(71) 「夫鳳皇騏驎之至也、猶醴泉之出、朱草之生也。……醴泉、朱草、和氣所生、然則鳳皇騏驎、亦和氣所生也。物生為瑞、人生為聖、同時俱然、時其長大、相逢遇矣。衰世亦有和氣、和氣時生聖人。聖人生於衰世、衰世亦時有鳳麟也。」(『論衡校釈』指瑞篇、七四六—七四七頁)。

(72) 当時の儒者が祥瑞の到来を太平の世に限定するというのは、前掲の『白虎通』封禪にも見え、また『論衡』でも「儒者又言、太平之時、屈軼生於庭之末、若草之

狀、主指佞人。」(是応篇、七五八頁) ほかいたるところで言及している。

(73) 『考古』一九八五・七参照。

(74) このような綬の身に着け方は林巳奈夫、一九九一、『第2章 佩玉と綬—序説—』、一六五—一七二頁に詳しい。

(75) 林巳奈夫、一九八八、二四六頁および注の(90)・(92) 参照。

(76) 例えば後漢中期の楊震の例が挙げられ、「冠雀」が三匹の「鱷魚」をもたらし、震が仕官し高位に就くことを予言した(『後漢書』巻五四、楊震列伝第44、一七六〇頁)。楊震が冤罪で自殺したときも、墓に大鳥が現れて鳴き、無実を証明した例(同上、一七六六—一七七七頁)がある。

(77) 佐原康夫、一九九一、四一頁では「玉璜」とし、田中有、一九八四、六七頁では「玉璣」とする。

(78) 「後漢趙岐字邠卿、京兆長陵人、多才芸、善画、自為壽藏於郾城、画季札・子産・晏嬰・叔向四人、居賓位、自居主位、各為讚頌。獻帝建安六年、官至太常卿。」(『歷代名画記』巻4、二七五頁、東洋文庫三〇五、平凡社、東京、一九七七年)。

(79) 「案其無狀誣罔之罪、信任忠良、平決臧否、使邪正毀譽、各得其所、寶愛天官、唯善是授。如此、咎徵可消、天應可待、問者有嘉禾芝草黃龍之見。夫瑞生必於

嘉士、福至實由善人。在德為瑞、無德為災。陛下所行、不合天意、不宜稱慶。」〔後漢書〕卷69、竇武伝第59、二二四〇頁。

(80) 森三樹三郎、一九七二、二四〇—二四四頁参照。

(81) 「年衰歲暮、悼無成功、將西田牧肥饒之野、殖生產、修孝道、營宗廟、廣祭祀。然後闢門講習道德、觀覽乎孔老之論、庶幾乎松喬之福。……其辞曰……配喬松之妙節。惟吾志之所庶兮、固與俗之不同。」〔後漢書〕卷28下、馮衍伝第18下、九八七頁。

(82) 「有布衣積善不怠、必致顏閔之賢、積惡不休、必致桀跖之名。非獨布衣也、人臣亦然。」〔潜夫論箋校正〕慎微、一四三頁。

(83) 堀池信夫、一九八八、「第2章後漢期の思想(四) 王符の天道・人道観」、特に三三四—三三七頁。

(84) 「昔文王始受命、武王定禍乱、至于成王、太平乃洽、祥瑞畢降。夫豈后德隆漸、浸之所通也。是以易嘉積善有餘慶。詩稱子孫其保之。非特王道然也。賢人君子。修仁履德者、亦其有焉。昔我烈列祖、暨于予考、世載孝友、重以明德、率禮莫違、是以靈祇、降之休瑞。免擾馴以昭其仁、木連理以象其義。斯乃祖禰之遺靈、盛德之所貺也。」〔芸文類聚〕卷20、人部、孝、蔡邕祖德頌、三三四頁。

(85) 「君昔在甕池、脩峭嶽之道、致黃龍白鹿之瑞、故凶画其像。」〔漢代石刻集成〕、102「五瑞図摩崖」。

〈参考文献〉

— 日本語・中国語論文 — (五十音順)

・池田知久、一九九四：「中国古代の天人相関論——董仲舒の場合」、溝口雄三他編『世界像の形成』アジアカラ考える、7、東京大学出版会、東京、一九九四年。
・石田英一郎、一九九四：「河童駒引考——比較民族学的研究」岩波文庫、青、一九三一、岩波書店、東京、一九九四年。

・菅野恵美、二〇〇七：「樹木画像の伝播と変容」、『中国史研究』第四八輯、別冊、韓国、二〇〇七年。

・小島祐馬、一九三三：「巴黎国立図書館藏敦煌遺書所見録(6)」、『支那学』第7卷第1号、一九三三年。

・小南一郎、一九九一：『西王母と七夕伝承』、平凡社、東京、一九九一年。

・佐原康夫、一九九一：「漢代祠堂画像考」、『東方学報』第63冊、京都、一九九一年。

・蔣英炬・吳文祺、一九九五：「漢代武氏墓群石刻研究」、山東美術出版社、濟南、一九九五年。

・田中有、一九八四：「漢墓画像石・壁画に見える祥瑞図について」『讖緯思想の総合的研究』、国書刊行会、東京、一九八四年。

・陳槃、一九四八：「古讖緯書録解題附録(2)」、『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第17本、台北、一九四八

年。

- ・林巳奈夫、一九七四：『漢代鬼神の世界』、『東方学報』第46冊、京都、一九七四年（林巳奈夫、一九八九所収、第五章）。
- ・林巳奈夫、一九八八：『中国古代の玉器』、琮について、『東方学報』第60冊、京都、一九八八年（林巳奈夫、一九九一所収、なお、頁数などは林、一九九一に基づく）。
- ・林巳奈夫、一九八九：『漢代の神神』、臨川書店、京都、一九八九年。
- ・林巳奈夫、一九九一：『中国古玉の研究』、吉川弘文館、東京、一九九一年。
- ・保科季子、二〇〇五：『受命の書——漢受命伝説の形成』、『史林』第88巻第5号、京都、二〇〇五年九月。
- ・堀池信夫、一九八八：『漢魏思想史研究』、明治書院、東京、一九八八年。
- ・松本栄一、一九五六：『敦煌本瑞応図巻』、『美術研究』一八四、一九五六年。
- ・森三樹三郎、一九七一：『上古より漢代に至る性命観の展開——人性論と運命観の歴史——』、東洋学叢書、創文社、東京、一九七一年。
- ・安居香山、一九七九：『緯書の成立とその展開』、国書刊行会、東京、一九七九年。
- ・安居香山、一九八八：『緯書と中国の神秘思想』、平河出版社、東京、一九八八年。
—英語論文—（アルファベット順）
- ・Wu Hung, 1989: *The Wu Liang Shrine: The Ideology of Early Chinese Pictorial Art*, Stanford: Stanford University Press, 1989.
—石刻史料・画集・報告書—（五十音順）
- ・『河北古代墓葬壁画』：河北省文物研究所編『河北古代墓葬壁画』、文物出版社、北京、二〇〇〇年。
- ・『漢代石刻集成』：永田英正編『漢代石刻集成』、京都大学人文科学研究所研究報告、同朋舎出版、京都、一九九四年。
- ・『考古』一九八一・二：南京博物館「徐州青山泉白集東漢画像石墓」、『考古』一九八一年第二期。
- ・『考古』一九八五・七：徐州博物館・新沂県図書館「江蘇新沂瓦窯漢画像石墓」、『考古』一九八五年第七期。
- ・『考古』一九八八・九：蘇兆慶・張安礼「山東綏県沈劉庄漢画像石墓」、『考古』一九八八年第九期。
- ・『考古与文物』一九八八・五・六：戴応新・魏遂志「陝西綏徳黄家塔東漢画像石墓群発掘簡報」、『考古与文物』一九八八年第五・六期。
- ・『神木大保当』：陝西省考古研究所・榆林市文物管理委員会辦公室編『神木大保当—漢代城址与墓葬考古報告』、科学出版社、北京、二〇〇一。

- ・『選集』…山東省博物館・山東省文物考古研究所編『山東漢画像石選集』、齊魯書社、濟南、一九八二年。
 - ・『全集3』…中国画像石全集編集委員会編『中国画像石全集 第3 山東漢画像石』、中国美術分類全集、山東美術出版社・河南美術出版社、濟南、二〇〇〇年。
 - ・『陝北』…李林・康蘭英・趙力光『陝北漢代画像石』、陝西文物精華叢書、陝西人民出版社、西安、一九九五年。
 - ・『中原文物』一九九六・三…南陽市文物研究所「河南省鄧州市梁寨漢画像石墓」、『中原文物』一九九六年第三期。
 - ・『中国美術全集』…常任俠編『中国美術全集 絵画編18 画像石画像磚』、上海人民美術出版社、上海、一九八八年。
 - ・『文物』一九七七・六…洛陽博物館「洛陽卜千秋壁画像墓発掘簡報」、『文物』一九七七年第六期。
 - ・『文物』一九八四・八…南京博物院・邳県文化館「東漢彭城相繆宇墓」、『文物』一九八四年第八期。
 - ・『文物』一九八六・三…安徽省文物考古研究所・馬鞍山市文化局「安徽省馬鞍山東吳朱然墓発掘簡報」、『文物』一九八六年第三期。
 - ・『文物』一九九二・四…山西省考古研究所・呂梁地区文物管理所・離石県文物管理所「山西離石馬茂庄東漢画像石墓」、『文物』一九九二年第四期。
 - ・『文物』一九九六・三…鄭州市文物考古研究所・滎陽市文物保護管理所「河南滎陽袁村漢代壁画墓調査」、『文物』一九九六・三
 - ・『文物』二〇〇三・四…徐州博物館「江蘇徐州大廟晋漢画像石墓」、『文物』二〇〇三年第四期。
 - ・『文物』二〇〇五・二…王金元「山西離石石盤漢代画像石墓」、『文物』二〇〇五年第二期。
 - ・『文物』二〇〇五・三…沈天鷹「洛陽出土一批漢代壁画空心磚」、『文物』二〇〇五年第三期。
 - ・『墓室壁画』…宿白主編『中国美術全集 繪畫編 12 墓室壁画』、中国美術全集編輯委員會編、文物出版社、北京、一九八九年。
 - ・『守屋孝蔵蒐集』…京都国立博物館編『守屋孝蔵蒐集 漢鏡と隋唐鏡図録』、京都国立博物館、京都、一九七一年。
 - ・『和林格爾漢墓壁画』…内蒙古自治区博物館文物工作隊編『和林格爾漢墓壁画』、文物出版社、北京、一九七八年。
- 追記……この論文は学習院大学東洋文化研究所東アジア学共創研究プロジェクトの成果である。研究にあたっては、馬淵昌也先生に御指導していただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

表 1 武梁祠祥瑞図榜題表 (図 2 参照)

〈凡例〉
 横：横位置。「前」は屋根に使用された二石のうち前側の石板、「後」は後ろ側の石板であることを示す。数字は第何層であるかを示す。
 縦：縦位置。「A」～「N」は各層に描かれた画像の位置を示す。「…b」は榜題の位置を示す。
 祥瑞名：「？」の付いた名称は推測、「一」は欠字により不明であることを示す。
 武梁祠榜題：榜題の文章は、『山左金石志』（『山左』）、『金石萃編』（『萃編』）、『金石索』を基にし、林巳奈夫（1974→1989）198-201頁、WuHung（1989）235-245頁、田中有（1984）61-65頁を参照した。
 【榜題の凡例】「□」：1字の欠字。「……」：複数文字の欠字。
 「[]」：1字の欠字だが、文字の一部が見え、比定できる文字。
 「()」：他の史料で補える文字、あるいは置き換えられる文字。
 文献：(梁)沈約撰『宋書』『符瑞志』、(梁)孫柔之撰『瑞応図』の記載を中心に、榜題に類似したものを記す。
 【書名の略称】
 「符・上/中/下」：『宋書』符瑞志上、中あるいは下を示す。頁数は北京、中華書局1974年本による。
 「瑞、玉函4-2975頁」：馬国翰輯『玉函山房輯佚書』4巻所載の『瑞応図』を示す。頁数は京都、中文出版社、1979年による。
 備考：ここでは「*」印の注記を示す。「WuHung, 237頁」はWuHung（1989）、「田中, 65・67・68頁」は田中有（1984）の参照頁を示す。
 【書名の略称】
 「山左」：畢沅輯『山左金石志』巻7。『萃編』：王旭著『金石萃編』巻21。
 「金石索」：馮盛鵬、馮雲鶴著『金石索』『漢武氏石室祥瑞図』。

横	縦	祥瑞名	武梁祠榜題 (Ab~Nb)	文献	備考
前1	A/Ab	莢莢	「莢莢莢時……」*	「莢莢、一名莢莢、夾階而生、一日生一莢、從朔而生、望而止、十六日、日落一莢、若月小、則一莢萎而不落、莢時生階」(符・下, 682頁) 「莢莢者、葉圓而五色。一名莢莢。十五莢、日生一莢、從朔至望、畢從十六、日毀一莢、至晦而盡。月小、則一莢卷而不落。聖明之瑞也。人君德合、乾坤自生。」(瑞、函4-2975頁)	*:『山左』参照。
	B/Bb	嘉禾? *1	「……周時……」*2	「嘉禾、五穀之長、盛德之精也。文者則一本而同秀、質者則異本而同秀。此夏殷時嘉禾也。周時嘉禾三本同穗貫葉而生、其穗盈箱。生於唐叔之園、以獻周公、曰此嘉禾也。大和氣之所生焉。此文王之德、乃獻文王之廟。異畝同穎謂之嘉禾。」(瑞、函4-2975頁) 「嘉禾、五穀之長、王者德盛、則二苗共秀。於周德、三苗共穗。於商德、同本異穗。於夏德、異本同秀。」(符・下, 827頁)	*1: 榜題が『瑞応図』の記載と一致。 *2: 『山左』参照。
	C/Cb	黃龍	「不澆池如魚、則黃龍游於池。」*	「黃龍者、四龍之長也。不澆池而漁、德至淵泉、則黃龍游於池。能高能下、能細能大、能幽能冥、能短能長、乍存乍亡。」(符・中, 796頁) 「黃龍者四龍之長、四方之正色、神靈之精也。能巨細、能幽明、能短能長、乍存乍亡。王者不澆池而漁、德達深淵、則應和氣而遊於池沼」、「不衆行不羣處。必待風雨而遊乎春氣之中、遊乎天外之野。出入應命以時、上下有聖則見、無聖則處」、「舜東巡狩黃龍負圖置舜前」(瑞、函4-2982頁)	*:『山左』参照。

横	縦	祥瑞名	武梁祠榜題 (Ab~Nb)	文 献	備 考
前 1	D/Db	—	「……[山]……」*	—	*『山左』参照。D~G のどの榜題かは不明。
	E/Eb	—		—	
	F/Fb	—		—	
	G/Gb	—		—	
	H/Hb	—			
	I/Ib	平露? *1	「……[至]」*2	—	*1: 傘状の葉をつけた植物。「平露如蓋」(符下)とあり、和人格爾墓壁画にも名前が見られるため、平露の可能性が高い。 *2: 『萃編』参照。
	J/Jb	麒麟	「□(麟)不刳胎残少, 則至。」*	「麒麟者, 仁獸也。牡曰麒, 牝曰麟, 不刳胎剖卵則至。麤身而牛尾, 狼項而一角, 黄色而馬足。含仁而戴義, 音中鍾呂, 步中規矩, 不踐生虫, 不折生草, 不食不義, 不飲滄池, 不入坑穽, 不行羅網。明王動靜有儀則見」(符・中, 791頁) 「麟者仁獸也。牡曰麒, 牝曰麟。羊頭鹿身牛尾馬蹄。黄色圓頂, 頂有一角, 角端戴肉。……(略)……王者德及幽隱, 不肖斥退賢者, 在位, 則至。明王動則有儀, 靜則有容, 則見」(瑞, 函 4-2978~2979 頁)	*: 『山左』参照。
	K/Kb	神鼎	「神[鼎], 不炊自孰(熟), 五[味][自]成」*	「神鼎者, 質文之精也。知吉知凶, 能重能輕。不炊而沸, 五味自生。王者盛德則出。」(符・下, 867 頁) 「神鼎者, 質文精也。知吉凶存亡, 能輕能重, 能息能行, 不約而沸, 不汲自盈, 中生五味。昔黃帝作鼎象太一。禹治水収天下, 美銅以為九鼎, 象九州。王者興則出, 衰則去。」(瑞, 函 4-2972~2973 頁)	*: 『山左』, 『萃編』参照。
	L/Lb	—/(樹木)	「……息/……□則至」*	—	*: 『山左』参照。L・M どちらの榜題かは不明だが, 『山左』では, 榜題を「下題」と言い, Lの榜題(Lb)だろうか。また, 『山左』によれば, 「□則至」の欠字には「土」字が上部に見える。
	M/Mb	—/(花)		—	
N/Nb	浪井	「浪井……」*	「浪井, 不鑿自成, 王者清静則應。」(符・下, 863 頁) 「王者清静則浪井出, 有仙人主之。」(瑞, 函 4-2972 頁)	*『山左』, 『萃編』参照。	
前 2	A/Ab	—		—	*: 『萃編』・『山左』より, 「女」偏と「日」偏の二字が残る。B・
	B/Bb	—	「……[女□][日□]……」*	—	

横	縦	祥瑞名	武梁祠榜題 (Ab~Nb)	文 献	備 考
前 2	C/Cb	—		—	Cどちらの榜題かは不明だが、『山左』での説明順から考えて、Bの榜題である可能性が高い。 WuHung 238 頁釈文では「一女□一日□—」としている。
	D/Db	芝英？/ (草)*1	「……英……」*2	「芝英者，王者親近耆老，養有道，則生」(符・下，867 頁) 「芝英者，王者親延耆，養老有道，則生」(瑞，函 4-2976 頁)	*1：田中 64 頁参照。 *2：『萃編』参照。
	E/Eb	—/(有蹄の動物)	—	—	
	F/Fb	白兔？/(小動物の足)*1	「白□□者，□□則至」*2	「白兔，王者敬耆老則見」(符・下，837 頁) 「王者恩加耆老則白兔見」，「王者應事應則見」(瑞，函 4-2980~2981 頁)	*1：足の様子と，榜題に残る表現が「符瑞志」に似ることから，白兔の可能性あり。 *2：『萃編』・『山左』参照。WuHung 238 頁釈文では□を棒線で表記し，複数の未解読文字とする。
	G/Gb	六足獸	「六足獸，謀及衆則至」*	「六足獸，王者謀及衆庶則至」(符・中，807 頁) 「王者謀及衆庶，則六足獸至」(瑞，函 4-2981 頁)	*：『山左』参照。
	H/Hb	—/(有角有蹄の動物)	—	—	
	I/Ib	—/(動物)	—	—	
前 3	A/Ab	—/(植物)	—	—	
	B/Bb	—/(動物，犬のよう)	—	—	
	C/Cb	—/(動物，小犬のよう)	—	—	
	D/Db	白狐？/(動物，尾が細い)*1	「白□王者□□則至」*2	「白狐，王者仁智則至」(符・中，803 頁) 「王者仁智，則白狐出」，「王者仁智，動准法度則見」(瑞，函 4-2980 頁)	*1：榜題の表現が「符瑞志」の説明に似ることから，白狐の可能性あり。 *2：『山左』参照。『萃編』では初めの部分を「白□□王者」に作る。
	E/Eb	—	「……不[方□]……」*	—	*：「不」と方偏の字が残るが，どの榜題のものか不明。『山左』，『萃編』参照。
	F/Fb	—	—	—	
G/Gb	—	—	—		

横	縦	祥瑞名	武梁祠榜題 (Ab~Nb)	文 献	備 考
前 3	H/Hb	一/ (動物)	「……白□如事… …」*	—	* : 『山左』、『萃編』参 照。IまたはJの榜題 の可能性有り。
	I/Ib	一/ (鳥)			
	J/Jb	一/ (動物)			
	K/Kb	白虎	「白□(虎)□, [王] 者不暴[虐], □ (則)白□(虎)至仁 不害人」*	「白虎, 王者不暴虐, 則白虎仁, 不害物」 (符・中, 807 頁) 「白虎者, 仁而不害。王者不暴虐, 恩及行 葦, 則見」(瑞, 函 4-2981 頁)	* : 『萃編』参照。
後 1	A/Ab	銀甕	「銀甕, 刑法得中 □(則)至」*	「銀甕, 刑罰得共 (中) 民不為非則至」(符・ 中, 812 頁) 銀甕「王者寡不及醉, 刑罰中人不為非, 則 銀甕出」(瑞, 玉函 4-2973)	* : 『山左』, 『萃編』 参照。
	B/Bb	比目魚	「比目魚, 王□(者) 明無不衡 (禦) 則 至」*	「比目魚, 王者德及幽隱則見」(符・下, 860 頁) 「王者明照出遠, 則比目魚見」(瑞, 函 4- 2983 頁)	* : 『山左』, 『萃編』 より欠字 1 字とする。 『金石索』では欠字 2 字とし, 「者幽」を補 う。
	C/Cb	白魚	「白魚, 武……(王 渡孟)津入于王[舟] ……」*	「白魚, 武王渡孟津, 中流入于王舟」(符・ 下, 852 頁)	* : 『萃編』参照。
	D/Db	比肩獸	「比肩獸, 王者德及 鰥寡則至」*	「比肩獸, 王者德及矜寡則至」(符・中, 807 頁) 「王者德及幽隱, 鰥寡得所, 則比肩獸至」 (瑞, 函 4-2981 頁)	* : 『山左』参照。
	E/Eb	比翼鳥	「比翼鳥, 王者德及 高遠則至」*	「比翼鳥, 王者德及高遠則至」(符・中, 812 頁) 「比翼鳥者, 王者德及高遠則至」, 「王者有 孝德則至」, 「王者不貪天下而重民命則至」 (瑞, 函 4-2978 頁)	* : 『山左』, 『萃編』, 『金石索』ともに同じ。
	F/Fb	玄圭	「元 (玄) 圭, 水 泉流通, 四[海]會 同則至」*	「玄圭, 水泉流通, 四海會同則出」(符・下, 851 頁), 「禹治水既畢, 天錫玄圭, 以告成 功」(符・上, 763 頁) 「元圭 王者敷告以憂天下, 厚人薄己, 卑 宮室而盡力乎溝洫, 則元圭出」, 「禹時天以 賜禹」, 「四海會同則元圭出山」(瑞, 函 4- 2974 頁)	* : 『山左』, 『萃編』 参照。
	G/Gb	璧流離 (碧琉璃)	「璧流離, 王者不 隱過則至」*	「璧流離, 王者不隱過則至」(符・下, 851 頁) 「碧琉璃 王者不多取妻妾, 則碧琉璃見」 (瑞, 函 4-2974 頁)	* : 『山左』, 『萃編』, 『金石索』ともに同じ。
	H/Hb	木連理	「木連理, 王者德 純洽, 八方為一家, 則連理生」*	「木連理, 王者德淳純洽, 八方合為一, 則 生」(符・下, 853 頁) 「異根同體, 謂之連理」, 「木連理者, 王者 德化洽, 八方合為一家, 則木連理」, 「王者 不失民心, 則木連理」, 「帝琴堂前有二橘樹 連理。改琴堂為連理堂」(瑞, 函 4-2976 頁)	* : 『山左』参照。

横	縦	祥瑞名	武梁祠榜題 (Ab~Nb)	文 献	備 考
後 1	I/Ib	赤熊	「赤熊，仁姦息□ 則至」*1	「赤熊，倭人遠，姦猾息，則入國」(符・中，803頁) 赤熊「王者奸宄息則赤熊入國，赤熊「王者遠倭人除姦猾，則赤熊見」(瑞，函4-2980頁)*2	*1:『萃編』、『金石索』参照。『山左』は「息」を「自」に作る。林，200頁釈文は「息則至」を「息□則至」に作る。 *2: 榜題が「符瑞志」の赤熊の説明に似，赤熊と赤熊の双方を記入。
	J/Jb	玉英	「玉英，五常[並] □(循/脩)則[至]]」 *	「玉英，五常並修則見」(符・下，851頁) 「王者五常並循，則玉英見」，「王者服飾不移，則出」，「自正飾服，不踰祭服乃出」(瑞，函4-2974頁)	*:『山左』，『萃編』，『金石索』参照。『金石索』では，欠字を「循」のように書す。『萃編』は「則[至)」を「則□□」に作る。
	K/Kb	—	「……山□」*	—	*:『萃編』参照。
	K'	—	「□者……」*	—	*『萃編』より，位置不明。Kとす。欠字には旁に「三」のような字が見える。
	L/Lb	玉馬	「□(玉)馬，□(王) 者清明尊賢□□□ □來□」*	「玉馬，王者精明，尊賢者，則出」(符・下，848頁) 「玉馬，王者精明，尊賢者，則出」，「玉馬者，瑞器也。王者清明篤実則見」，「玉澤馬者，節曠時來」，「王者順時而制事，因時而治道，則來」(瑞，玉函4-2973頁)	*:『山左』参照。『萃編』では「賢」の後を5字欠字に作る。
	M/Mb	—/(動物。二本の足と背に巻き上がる尾が残る。)*1	「□□王者□□則至」*2	—	*1:『山左』の説明参照。 *2:『山左』参照。林，200頁釈文は「……旬……」とする。
後 2	A/Ab	玉勝	「玉[勝]，王者… …」*	—	*:『山左』，『萃編』参照。
	B/Bb	澤馬	「澤馬，王者勞來□(百)□(姓)，則□」*	「澤馬者，王者勞來百姓則至」(符・中，802頁) 玉馬「玉澤馬者，節曠時來」(瑞，玉函4-2973頁)	*:『山左』参照。
	C/Cb	白馬朱鬣	「白馬朱鬣(鬣)， □(王)[者]□(任) □(賢)良則至」*	「白馬朱鬣，王者任賢良則見」(符・中，802頁) 「明王在上則白馬朱鬣至」，「王者乘服有度，則白馬朱鬣」，「白馬朱鬣者，任用賢良則出」(瑞，函4-2982頁)	*:『山左』参照。
	D/Db	渠搜	「渠[搜]來」*	「渠搜，禹時來獻裘」(符・下，863頁) 白裘「禹時，渠搜民乘白馬來獻」(瑞，函4-2975頁)	*:『山左』，『萃編』参照。
	E/Eb	—/(鹿の頭)	「□□王……」*	—	*:『萃編』参照。Wu Hung, 242頁釈文では「一 王 一」とする。

横	縦	祥瑞名	武梁祠榜題 (Ab~Nb)	文 献	備 考
後 2	F/Fb	巨觔 (巨鬯)	「皇帝 (黄帝) 時南 [夷] 乘鹿, 來獻巨觔」*	「巨鬯, 三禺之禾, 一稔二米, 王者宗廟修則出」(符・下, 861頁) 巨鬯「巨鬯者, 三禺之黍, 一稔二米, 王者宗廟修, 則生」, 「昭穆序, 祭祠宰人咸有敬讓禮容之節, 威儀之美, 則巨鬯生」, 「王者節敬依禮度, 親疎有別, 則巨鬯生」, 「黄帝時, 南夷乘白鹿來獻巨鬯」(瑞, 玉函 4-2976)	*: 『山左』, 『萃編』参照。
	G/Gb	姜嫄? / (女性) *1	「……□生后稷」* 2	「春秋元命苞曰, 周本姜嫄遊閭宮。其地扶桑, 履大跡, 生后稷」(太平御覽卷 135) 「春秋元命苞曰, 周先姜原履大人跡, 生后稷扶桑。推種生, 故稷好農」(同上卷 822)	*1: 和林格爾墓祥瑞圖に「姜元」があり, 田中, 65・67・68頁では后稷の母「姜原」とす。 *2: 林, 201頁釈文参照。『山左』は「生」を「主」に作り, 『萃編』は「年」に作る。
	H/Hb	— / (女性)	「……帝……」*	—	*: 林, 201頁参照。
	I/Ib	—	「……則 [至]」*	—	*: 『山左』, 『萃編』参照。
	J/Jb	玉甕? *1	「……盈王者清 [廉] [則] 出」*2	「玉甕者, 不汲而滿。王者清廉則出」(符・下, 867頁) 「玉甕者, 聖人之應也。不汲自盈。王者飲食有節, 則出」(瑞, 函 4-2973頁)	*1: 田中 64頁参照。 *2: 『萃編』参照。『山左』では末字を「至」に作る。

The transition of auspicious omens in Eastern Han's funeral pictorial art

KANNO Emi

Key words: Eastern Han, funeral pictorial art, auspicious omens, Heaven, human world

Albino fish, phoenix, silver pot, flowing up alcohol spring...etc, people enthusiastically believed in these auspicious omens during the Han dynasty period, particularly in Eastern Han. The pictures had been increasing as one of an important subject in funeral pictorial art during Eastern Han. This paper focuses on the role of figures of auspicious omens in funeral pictorial art, and on the change of circumstance between Heaven and human.

There are two types of styles in auspicious omens figures: "Illustrating style" and "Composing style". The Illustrating style, shows omen figures depicted in flamed space to show each omen clearly, sometimes adding written explanations. This style comes from catalogues that show what type they are or when they will appear. Auspicious omens were regarded as good response from Heaven to the emperor's conduct, and they were also considered to legitimize the Han dynasty, so that there were several kinds of catalogues, and the spread of these catalogues made the symbolic power of omens hard, and made omens image popular.

In the Composing style the omen figure is one of many elements and figures, and together they compose a full picture. This type of omen has for a long time been applied to depict heaven or paradise. In the middle part of Eastern Han, these omens started to be drawn together with subjects of the human world, for example structures, humans, and trees. But as I show, at that time these omen figures look as if there is no relation with other figures of humanity, and seem

to be arranged in blank space. These omens express harmony of “Qi” energy.

In the latter part of Eastern Han small changes happened with their expression: The figure of composing style became more active, they started to interact with other figures in the picture.

This change relates with the people’s way of thinking about how auspicious omens would appear. Auspicious omens were not only for the sovereign any more, and Heaven came to respond to people’s virtuous behavior by the arrival of auspicious omens.

The figures of auspicious omens are not only representing the peace of Han dynasty by their consistent expression of Qi energy, but they also praise the ancestors, the deceased, or descendants for virtuousness.